熊本県文化財調査報告　第161集

塚坊主古墳

── 肥後古代の森整備事業に伴う埋蔵文化財調査 ──

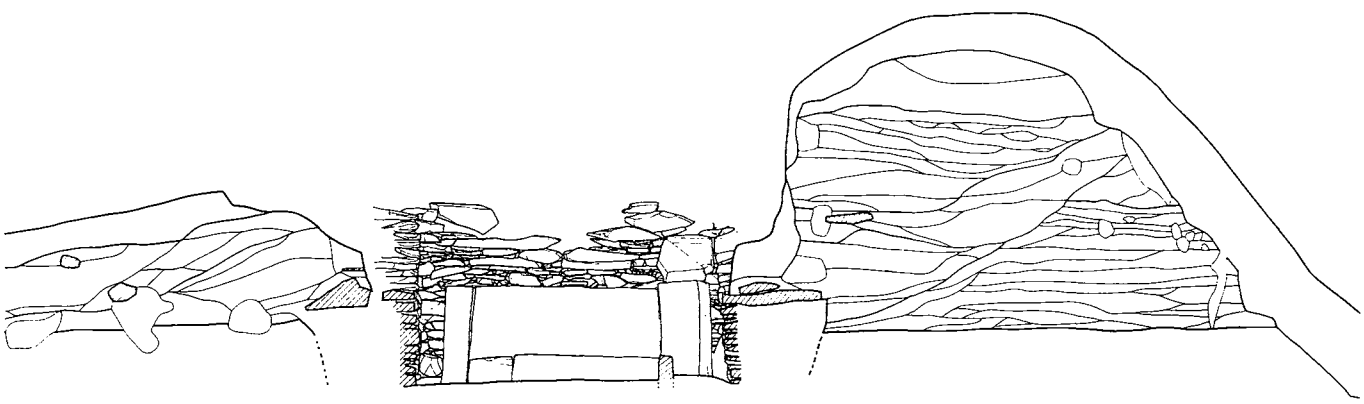
1997. 3

熊本県教育委員会

つかぼうずこふん

塚坊主古墳

―― 肥後古代の森整備事業に伴う埋蔵文化財調査 ――



1997. 3

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、古来より多くの文化遺産を現代に残している菊池川流域（山鹿市・鹿央町・菊水町）を多くの人々に理解してもらい、学習の場として利用していただくために、「肥後古代の森」設置を推進し、平成６年度に完成いたしました。

ここに報告する塚坊主古墳は、肥後古代の森の菊水地区に所在し、石室の保存、墳丘・周濠の整備・復元に必要な基礎資料を得るために、平成４年度に発掘調査を実施したものであります。

調査の結果、墳丘の構築方法や古墳の全体規模が明確になるなど、大きな成果を得ることができました。この報告書が、文化財保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に際しては、地元菊水町をはじめ関係各位の御理解と多大の御協力をいただきました。ここに心から厚くお礼を申し上げます。

平成９年３月３１日

熊本県教育長　　松 尾　隆 樹

例　　言

1　本書は、

査の報告書である。

2　発掘調査は、

遺物整理を平成５年度に、

査資料は熊本県教育庁文化課で保管している。

3　平成２年度に行った石室の調査については、

4　平成４年度の発掘現場での遺構の実測・写真撮影は、

主として本山千絵が行った。遺構・遺物実測図の作成・製図は、

井勝子、

5　写真図版の空中写真は（株）スカイサーベイに委託した。

6　本書の執筆は第Ⅰ章第１節を松本健郎が、第Ⅲ章第１節－４・第２節－６及び第Ⅳ章第１節－３・第２節－２を本山千絵が担当し、他を山城が行った。

7　本書の編集は、

凡　　例

1　本書に示した方位は、

2　本書に掲載した周辺地形図は、

報告書」のものを再掲載している。

3　遺構の深さは、

本 文 目 次

序　文

例言・凡例

目次・報告書抄録

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1
第３節　調査の方法 …… 2
第４節　調査の進行状況 …… 2

第Ⅱ章　古墳の立地と環境 …… 5
第１節　古墳の立地と地理的環境 …… 6
第２節　古墳の歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査の成果 …… 9
第１節　後円部の調査 …… 9
1　墳丘と石室の現状 …… 9
2　石室の調査 …… 9
(1)　羨道部 …… 9
(2)　前　室 …… 9
(3)　後　室 …… 10
3　盛土と地山整形 …… 14
4　出土遺物 …… 17
第２節　周濠の調査 …… 17
1　トレンチの設定について …… 17
2　くびれ部 …… 17
(1)　Ａトレンチ …… 17
3　後円部 …… 20
(1)　４号トレンチ …… 20
(2)　６号トレンチ …… 20
(3)　Ｌトレンチ …… 22
(4)　Ｅ～Ｊトレンチ …… 23
4　前方部 …… 23
(1)　Ｂトレンチ …… 23
(2)　Ｃ・Ｄトレンチ …… 24
(3)　Ｋトレンチ …… 26
5　小　結 …… 26
6　出土遺物 …… 28
(1)　形象埴輪 …… 28
(2)　円筒埴輪 …… 28
(3)　須恵器 …… 32

第Ⅳ章　総　括 …… 39
第１節　各調査成果の要旨 …… 39
１　後円部の調査から …… 39
２　周濠の調査成果から …… 39
３　出土遺物から …… 41
第２節　問題点と今後の課題 …… 41
１　石室から …… 41
２　出土遺物から …… 42
写真図版

挿図目次

第１図　基準杭配置図 …… 3
第２図　周辺地形図 …… 5
第３図　周辺遺跡分布図 …… 7
第４図　石室実測図 …… 巻末付図
第５図　石屋形実測図 …… 13
第６図　石室西側墳丘土層図 …… 14
第７図　石室東側墳丘土層図 …… 15
第８図　石室南東盛土除去後平面図 …… 16
第９図　遺物実測図 …… 17
第10図　トレンチ配置図 …… 18
第11図　Ａトレンチ実測図 …… 19
第12図　４号・６号トレンチ土層図 …… 21
第13図　Ｌトレンチ実測図 …… 22
第14図　Ｂトレンチ土層図 …… 24
第15図　Ｃ・Ｄトレンチ実測図 …… 25
第16図　Ｋトレンチ土層図 …… 26
第17図　塚坊主古墳平面図 …… 27
第18図　遺物実測図 …… 28
第19図　遺物実測図 …… 29
第20図　遺物実測図 …… 31
第21図　遺物実測図 …… 33
第22図　遺物実測図 …… 34
第23図　塚坊主古墳復元図 …… 40

表目次

第１表　調査進行表 …… 2
第２表　周辺遺跡地名表 …… 8
第３表　埴輪観察表(1) …… 36
第４表　埴輪観察表(2) …… 37
第５表　第６・７図土層解説表 …… 38

図 版 目 次

図版１　塚坊主古墳全景
図版２　１　塚坊主古墳遠景（西から）　２　石室（南から）
図版３　石屋形装飾（正面）
図版４　石屋形装飾（正面）
図版５　石屋形装飾（側壁）　１　左壁　２　右壁
図版６　石室　１　南から　２　北から
図版７　石室　１　東から　２　西から
図版８　石室　１　前室左壁　２　後室左壁
図版９　石室　１　後室右壁　２　前室（北から）
図版10　石室　１　後室左袖　２　後室右袖
図版11　石室　１　後室奥壁左コーナー　２　後室奥壁右コーナー
図版12　墳丘　１　石室東側土層　２　石室西側
図版13　墳丘　１　石室西側土層　２　石室西側土層
図版14　周濠　１　Ａトレンチ（南から）　２　Ａトレンチ（南東から）
図版15　周濠　１　Ａトレンチ遺物出土状況　２　Ｂトレンチ（南から）
図版16　周濠　１　Ｃ・Ｄトレンチ（前方部から）　２　Ｃ・Ｄトレンチ（南西から）
図版17　周濠　１　Ｄトレンチ（南東から）　２　Ｄトレンチ（南西から）
図版18　周濠　１　Ｌトレンチ（東から）　２　Ｌトレンチ（北東から）
図版19　周濠　１　Ｌトレンチ遺物出土状況　２　４号トレンチ（西から）
図版20　周濠　１　６号トレンチ（西から）　２　前方部西側（後円部から）
図版21　出土遺物（円筒埴輪）
図版22　出土遺物（円筒埴輪）
図版23　出土遺物（玉類・形象埴輪・円筒埴輪）
図版24　出土遺物（須恵器）
図版25　出土遺物（須恵器）
図版26　出土遺物（須恵器）

報告書抄録

ふりがな	つかぼうずこふん
書　　名	塚坊主古墳
副 書 名	肥後古代の森整備事業に伴う文化財調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ号	第161集
編著者名	山城敏昭・本山千絵
編集機関	熊本県教育委員会
所 在 地	〒862　熊本市水前寺６丁目18番１号
発行年月日	西暦1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
塚坊主古墳	玉名郡菊水町瀬川字清水原	433659	未定	32度 57分 55秒	130度 36分 4秒	199207 —199210	2000㎡

主な時代	種別	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
古墳時代後期	古墳	横穴式石室	小玉、粟玉	石室構造は複室 天井は失われているが、墳丘土層から高さ判明
		周濠	円筒埴輪	川西編年Ｖ期前半、高橋編年Ｖ期 タガ下辺に貼付前の爪状圧痕確認
			形象埴輪	２点あり（種別不明、棒状部位不明）
			須恵器	壷、器台

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

　塚坊主古墳の調査は、
の横穴式石室に装飾文様のあることが確認されている。その後昭和50年度に菊水町教育委員会による清原古墳群の確認調査が行われ（以下「50年度調査」とする）、
れ、
の丘」を設置する構想に基づいた清原古墳群の周濠確認調査を実施し（以下「56年度調査」とする）、
主古墳においては、
的とした調査が行われ、
　平成２年度、
埋め戻されていた石室の埋土を取り除き、
われ（以下「２年度調査」とする）、
た装飾文様を再確認し、
　平成４年度に、
査と、
に文化課文化財保護主事山城敏昭と嘱託長尾至明が調査を行った。なお、
治代が調査に加わった。

第２節　調査の組織

調 査 主 体　熊本県教育委員会
調査責任者　大塚正信（平成４・５年度文化課長）
　　桑山裕好（平成６・８年度文化課長）
調 査 総 括　隈　昭志（平成４年度教育審議員・課長補佐）
　　平野芳久（平成５年度教育審議員・課長補佐）
　　丸山秀人（平成６年度課長補佐、
　　松本健郎（平成４年度文化財調査第２係長、
調査・報告書　山城敏昭（文化財保護主事、
　　教諭）　六田育子（嘱託、
　　本山千絵（嘱託、
　　三宅由華（嘱託、
調 査 事 務 局　松崎厚生（平成４・５年度課長補佐）
　　白井哲哉（平成６年度課長補佐）
　　渕上重喜（平成８年度教育審議員・課長補佐）
　　木下英治（平成４～６年度主幹・経理係長）
　　江尻靖子（平成８年度総務係長）
　　高濱保子（平成４～６年度参事）

第３節　調査の方法

中村幸宏（平成４～６年度参事）
相馬治久（平成４・５年度参事）
高宮優美（平成６年度主任主事、
岸本誠司（平成８年度主事）
東　修　（平成８年度主事）

調査指導及び協力者（敬称略、順不同）

沢田正昭（奈良国立文化財研究所）　柳沢一男（宮崎大学）　鐘方正樹(奈良市教育委員会)　森田克行（高槻市教育委員会）　柳沢一宏（榛原町教育委員会）　高木恭二（宇土市教育委員会）　菊水町教育委員会　野田拓治　最上　敏　坂口圭太郎　前田軍治（熊本県立装飾古墳館）　福原博信（五木村教育委員会）　嶋田茂広（㈲木村組）　西住欣一郎（県文化課）　岡本勇人（菊陽町教育委員会）

第３節　調査の方法

塚坊主古墳の墳丘整備は、
こで、
清掃後に周濠の範囲を平面で明らかにした後、
ち上がり等を確認することにした。トレンチの設定に際しては、
側の状況を明らかにすることに加えて、
また、
測量機器により中軸に沿った10m×10mの区画を設定して行うことにした。
後円部墳丘の調査は、
沿って墳丘を断ち割り、
石室については、
し、
以上の調査の間に作製される資料には、
盛土断面図、1

第４節　調査の進行状況

第１表　調査進行表

	7　月	8　　月	9　　月	10　月
調査内容	事前打合せ　　トレンチ実測 表土剥ぎ　石室埋土除去　墳丘断ち割り 周濠検出・遺構検出　　盛土実測 周濠トレンチ・遺構調査　　周濠平面実測・石室実測			

調査の進行状況を月別に示すと概ね次のようになる。

７月　上旬の環境設計会社および施工業者を含めた事前打合せで、

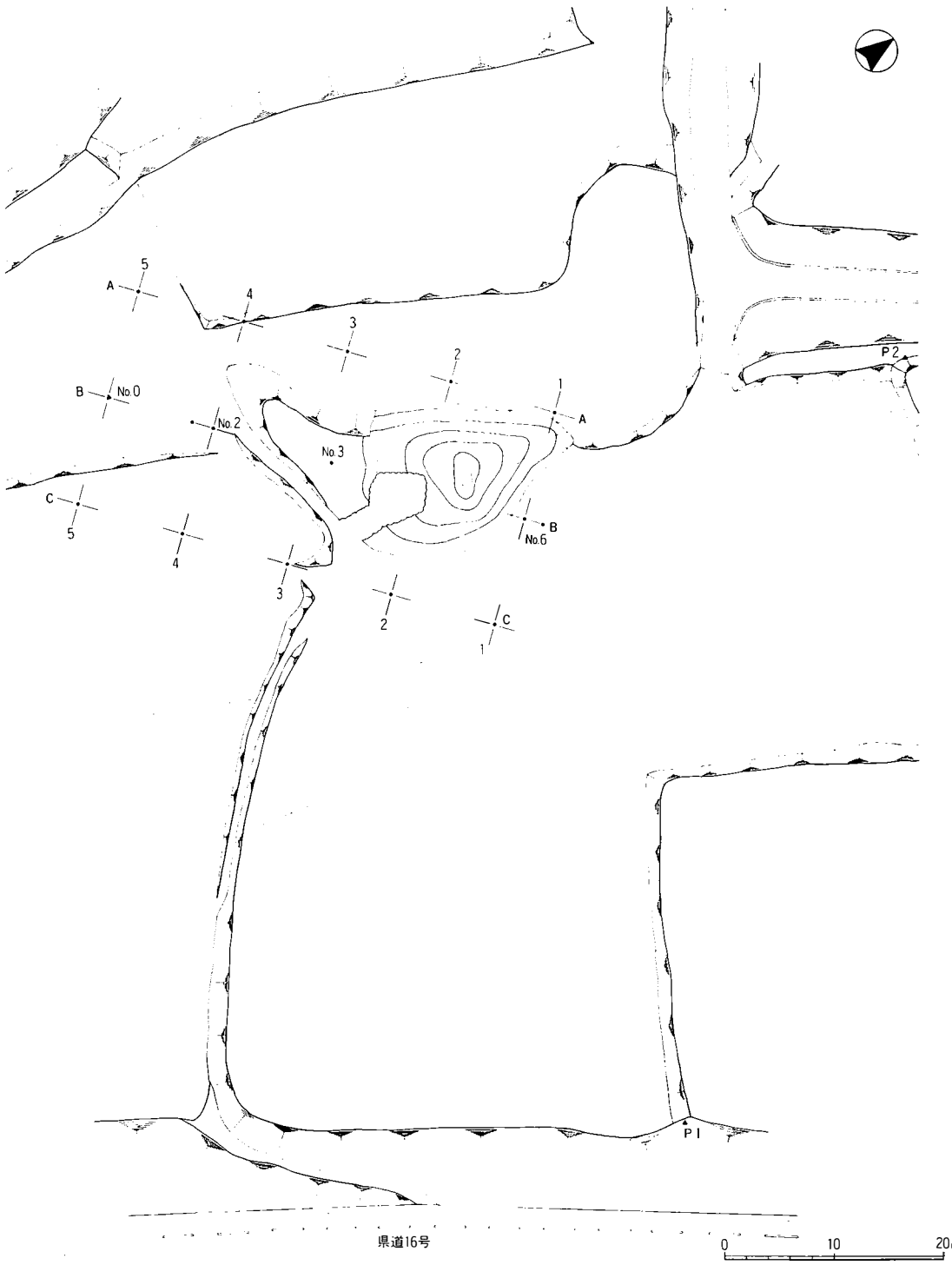
打合せは新規の調査資料が加わるごとに、

ぎを開始し、

８月　周濠検出後、

定し調査を行った。東側くびれ部の残存状況が良好でなかったため、

ことになる。また、



第１図　基準杭配置図

第４節　調査の進行状況

屍床の主軸に沿った部分から、

面から、

　石室の割付け後、横

ンチの断面と出土遺物の実測を始める。

　９月　盛土除去部の裏込石と盛土断面の実測を行った後、

る。仮設覆屋内の温度の上昇で実測能率が低下し、

　10月　実測完了後、

　報告書作成については、

原稿作成、

註⑴－１　菊水町教育委員会編　1976　「船山」菊水町教育委員会文化財調査報告第１集　菊水町教育委員会

　　２　江田船山古墳編集委員会編　1980　「清原古墳群周隍調査概要」『江田船山古墳』　菊水町教育委員会

⑵　緒方勉編　1982　「清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査」　熊本県文化財調査報告第55集　熊本県教育委員会

第Ⅱ章　古墳の立地と環境

第２図　周辺地形図

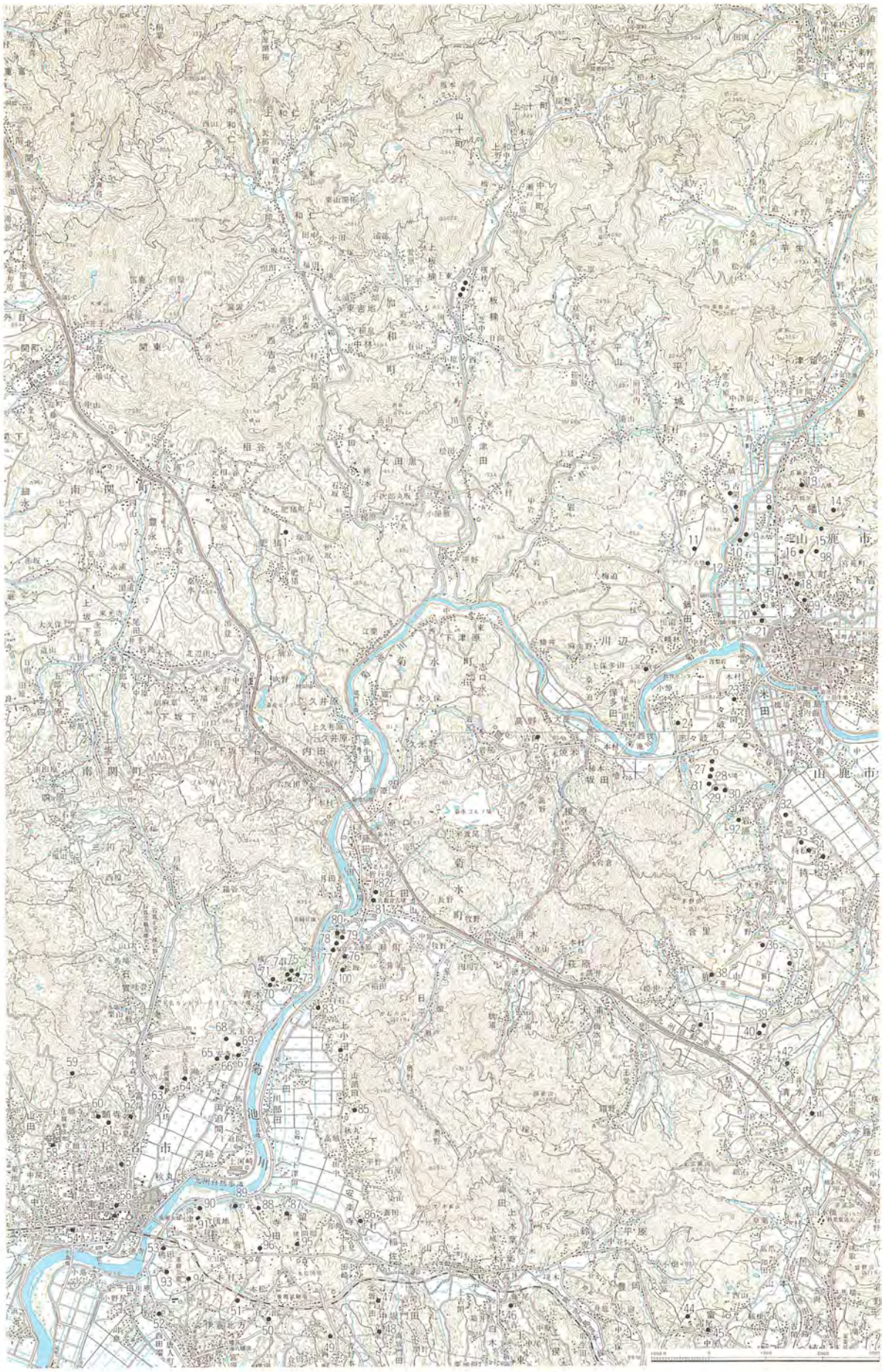
第１節　古墳の立地と地理的環境（第２・３図）

　阿蘇西外輪山に源を発する菊池川は、
やや蛇行しながら玉名平野を横切り、
名平野へ流れ出る付近の東側の低丘陵の清原台地、
　この低丘陵地は、
川、
を望む。標高約30ｍ、北
　塚坊主古墳はこの舌状丘陵の南端部に位置し、

第２節　古墳の歴史的環境（第３図、第２表）

　塚坊主古墳の所在する菊池川下流域は、
Ｉ地域の菊池川流域とその周辺地域内の細分された３グループ中の１グループにあたる。（他に中流域のグループ、
　さらに、
と菊池川下流域の海岸に近い地域のグループｂに分けることが分布の上から可能である。
　清原台地上には塚坊主古墳を含む３基の前方後円墳が所在する。菊池川下流域には11基の前方後円墳が分布しており（第２表）、
次の段階で清原台地上の船山古墳、
　また、
古墳、
の平面形態や構造で類似点が認められ、
　ところで塚坊主古墳では、
時代のものは不明確であるが、
　ここで、
きる集落の資料は現在のところ不足している。

註(1)　西住欣一郎　1991　「肥後における古墳時代研究の現状と課題」『交流の考古学』　肥後考古学会



第３図　周辺遺跡分布図（古墳のみ）

第２表　周辺遺跡地名表（古墳のみ）

NO	古 墳 名	所 在 地	備考
1	塚原古墳	玉名郡南関町肥猪塚原	円
2	幽霊塚古墳	玉名郡三加和町板楠桜町	円
3	火の出塚古墳	玉名郡三加和町板楠桜町	円
4	第３号古墳	玉名郡三加和町板楠桜町	円
5	鬼天神古墳	山鹿市城鬼天神	
6	馬塚古墳	山鹿市城鬼天神	円・装
7	馬塚南古墳	山鹿市城鬼天神	
8	京塚古墳	山鹿市杉平原	円
9	河童塚古墳	山鹿市杉古屋敷	
10	姫塚古墳	山鹿市杉古屋敷	
11	オブサン古墳	山鹿市城西福寺	円・装
12	チブサン古墳	山鹿市城西福寺	前・装
13	竜王山古墳	山鹿市杉小峯	円
14	銭亀塚古墳	山鹿市名塚	前
15	御霊塚古墳	山鹿市熊入北原	
16	乳母塚古墳	山鹿市熊入北原	円
17	倉塚古墳	山鹿市熊入戊亥原	
18	弁慶ヶ穴古墳	山鹿市熊入竹の下	前？装
19	臼塚古墳	山鹿市石臼塚	円
20	臼塚西古墳	山鹿市石臼塚	
21	金屋塚古墳	山鹿市石金屋塚	
22	保多田古墳	山鹿市保多田本村	円
23	宮の脇古墳	山鹿市志々岐宮ノ脇	円
24	小原大塚古墳群	山鹿市小原大塚	円
25	塚さん古墳	鹿本郡鹿央町岩原桜の上	
26	狐塚古墳	鹿本郡鹿央町岩原下原	円
27	下原古墳	鹿本郡鹿央町岩原下原	円
28	双子塚古墳	鹿本郡鹿央町岩原塚原	前
29	寒原第１号古墳	鹿本郡鹿央町岩原寒原	円
30	寒原第２号古墳	鹿本郡鹿央町岩原寒原	円
31	馬不向古墳	鹿本郡鹿央町岩原馬不向	円
32	久保原古墳	鹿本郡鹿央町岩原久保原	
33	持松塚原古墳	鹿本郡鹿央町持松塚原	円
34	持松塚原古墳群	鹿本郡鹿央町持松塚原	
35	持松中屋敷古墳群	鹿本郡鹿央町持松中屋敷	
36	双塚第１号・２号古墳	鹿本郡鹿央町合里青井	
37	下原古墳	鹿本郡鹿央町広天神免	
38	堤第１号～３号古墳	鹿本郡鹿央町合里吉井原・堤	円
39	芹ヶ迫古墳	鹿本郡鹿央町広芹ヶ迫	円
40	上谷宮古墳	鹿本郡鹿央町上谷宮	円
41	駄の原長者古墳	鹿本郡鹿央町合里東駄の原	
42	臼井古墳	鹿本郡植木町清水臼井	
43	どんどん塚古墳	鹿本郡植木町清水長沼	
44	穴カンノン古墳	鹿本郡植木町富応西原	
45	丸塚古墳	鹿本郡植木町富応市の尾	
46	助吉古墳	玉名郡玉東町二俣西助吉	
47	白骨ドン古墳	玉名市北坂門田井戸	
48	京塚古墳	玉名市中坂門田京塚	
49	青野古墳	玉名市青野本村	
50	伊倉大塚古墳	玉名市伊倉北方鳥越	
51	垣塚古墳	玉名市伊倉北方東垣塚	
52	中北古墳	玉名市伊倉北方五社	
53	桃田古墳	玉名市大倉桃田原	
54	だいの島古墳	玉名市中だいの島	前？
55	稲荷山古墳	玉名市繁根木馬場	前
56	伝左山古墳	玉名市繁根木北	円
57	岩崎古墳	玉名市岩崎池田	
58	高岡古墳	玉名市山田高頭	
59	蛇ヶ谷古墳	玉名市立願寺蛇ヶ谷	
60	大塚古墳	玉名市立願寺大塚	円
61	小塚古墳	玉名市立願寺大塚	円
62	冷水塚古墳	玉名市富尾冷水	円
63	西原古墳	玉名市玉名西原	
64	大坊古墳	玉名市玉名出口	前・装
65	永安寺西古墳	玉名市玉名永安寺	円？
66	永安寺東古墳	玉名市玉名永安寺	円・装
67	馬出古墳	玉名市玉名馬出	円・装
68	絵下経塚古墳	玉名市玉名絵下	
69	小路古墳	玉名市玉名小路	円
70	田代中の塚古墳	玉名市溝上田代	円
71	田代阿弥陀塚古墳	玉名市溝上田代	円
72	宮の後古墳	玉名市溝上下前田	円
73	真福寺東古墳	玉名市溝上前田	
74	前田古墳	玉名市溝上前田	
75	真福寺古墳	玉名市溝上前田	円？
76	姫塚古墳	玉名郡菊水町瀬川松坂	円
77	塚坊主古墳	玉名郡菊水町瀬川清水原	前・装
78	虚空蔵塚古墳	玉名郡菊水町江田清原平	前
79	江田船山古墳	玉名郡菊水町江田大久保原	前
80	京塚古墳	玉名郡菊水町江田清原	円
81	江田穴観音古墳	玉名郡菊水町江田中小路	円
82	若宮古墳	玉名郡菊水町江田中小路	前
83	椿山古墳	玉名郡菊水町瀬川本村	前？
84	徳丸古墳群	玉名市上小田徳丸・榎町	前３基
85	山下古墳	玉名市山部田山下	前
86	随月古墳	玉名市安楽寺随月	
87	上津留古墳	玉名市津留小部田	
88	寺田古墳群	玉名市寺田宇土	円４基
89	城ヶ辻古墳群	玉名市寺田城ヶ辻	円
90	飯塚古墳	玉名市向津留飯塚	
91	大久保小塚古墳	玉名市向津留大久保	
92	鬼塚古墳	鹿本郡鹿央町岩原青苔	
93	中北アカハゲ古墳	玉名市伊倉北方アカハゲ	
94	高田古墳	玉名市大倉高田	円
95	世間部塚古墳	玉名市寺田世間部	
96	ナカント塚古墳	玉名市寺田吉丸	
97	高野古閑古墳	玉名郡菊水町高野古閑屋敷	円
98	ビシャモン塚古墳	山鹿市熊入北原	円
99	観念寺古墳	山鹿市熊入	
100	松坂古墳	玉名郡菊水町松坂	円？

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　後円部の調査

１　墳丘と石室の現状

残存する墳丘の形状は、

主体部は横穴式石室であるが、

２年度調査前の状況では、

した天井石と判明し、

一部も抜き取られた状況であった。２年度調査では、

を明らかにする調査が行われ、

今回の主体部の調査は、

室については、

年度調査時に安全上の問題から除去されているため、

なお、

の奥を前室、前

前面の埋葬施設を屍床と呼ぶことにする。また、

る。（ところで、

るが、

ものではない。）　また、

石室横断軸に沿って石室左右の盛土の状況や東側の一部の地山整形（掘り方）の調査を行うことにした。

註(1)　熊本県教育委員会編　1994　「国指定史跡塚坊主古墳」熊本県文化財整備報告第１集　熊本県教育委員会

２　石室の調査（巻末第４図）

石室の主軸はMN-3°-Eで、

まれている。以下石室の各部について述べる。

⑴　羨道部

羨道部の基底面は削平により表土の直下が地山となっており、

たかは不明である。また羨道の両壁の構造も本調査では明らかにしていないが、

0.8m、右

羨門袖石に面する部分に、2

いる。積み方は不規則とはいえ、

不明である。

⑵　前　室

羨門部と玄門部の左脇には袖石が残存しており、

門で約15cm・30cm、

い方を上にして据えている。袖石最高部の標高は、

には、
る石材が残り、
31.17～20ｍなので、
古墳やチブサン古墳の例から、
実際の前室の天井高を現在の状況から推定するのは困難である。また、
取り穴から推定して、
　前室の平面形態は右側壁が失われているので明確ではないが、
推定され、
　石室に使用されている石材は、
割石である。
　右側壁は現状では扁平な割石が積まれているが、
る石材は調査後の埋め戻し時に散在する石材を任意に積んだものと思われる。（実測図網部）
　左側壁も同写真から上部３段（実測図網部）は埋め戻し時に任意に積んだものと思われ、原
るのは下部の石材のみであろう。１段目は中央部には石材を置かず、
き、
述する後室に比較すると簡素な積み方である。

⑶　後　室

①　平面

　後室床面の平面は、
方形に近い。奥壁に沿って右寄りに石屋形を、
いる。図示していないが、
んでいたとされており、
　また、

②　壁

　左側壁で積石が残存するのは、
る。基本的には小口面幅が40～60㎝の扁平な割石が主体で、
～10㎝の厚さのもので、
のの直立気味である。
　右側壁も左側壁とほぼ同様の残存状況で、
る。積石は床面から数段は左側壁と同様の石が主体だが、
で、
である。
　奥壁は石屋形がほぼ密着しているため、
い。残存しているのは、
み方であるが、
く量も多い。それより上位になると、
　左右側壁と奥壁のコーナーは、
ていない。左側壁側では、
るものも確認している。
　間口側の壁は前室壁と同様に右側では2/3が、

に説明できないが、
た両側壁とのコーナーも明瞭に角ばっており、
止めており、
　石室の上部構造は、
坊古墳やチブサン古墳が、
を行っていることから、
送りを行ったものと考える。後述する墳丘盛土の調査成果から、
と推定されるので、
　③　**石屋形**（第５図）
　奥壁沿いの埋葬施設は家形屋根を持つ石屋形で、
２で構成され、
いない。
　石屋形壁材奥壁は、
レベルでの距離は約３㎝を測った。（したがって、
る。）また、
やや右よりの配置である。
　屋根材は京大調査前の盗掘により中央部を破壊され、
回の調査記録からは、
坦部で長さ約1.15m、幅
まる部分までの立ち上がり（平縁）は、
るが、
　屋根材の短辺の屋根部の途中から基底部にかけて各１個の縄掛突起が彫り出されている。左側のものは欠損して規模が明らかでないが、
膨れの楕円形を呈し、
上面の張り出す方向は、
いうよりも、
　壁材の側壁最高部の石屋形床からの高さは、
ために生じた差で、
を測り、
ルでの長さは0.87m、
外壁は粗い加工のままだが、
　奥壁材の上面の標高は、
2.06m、
側壁材に合わせて、
　入り口材上面の標高は、
間の所々に隙間があったことが分かる。また、
１）は、
２）は屍床の石材の高さまでしか残存していない。（京大調査時の写真では残存している）
　左材１は上面の長さ0.21m、幅
の長さ0.34m、

を測る。左材２と右材との間は、床

て工具痕が観察できる。

　床材は２枚の板石で構成され、

m、右

m、中

合わせて加工されている。

　④　屍　床

　屍床は、

材質は石屋形よりややもろい。短い方の２枚の板石の厚さは0.11m前後、

置は長い材の１つを石屋形の間口に密着させて置き、

を配置し、

置き、

填し奥壁側を区画しているように見えるが、

め、

　屍床床面の標高は31.14mで、

た３枚の板石は、

は、

　屍床床面の内法の規模は、

幅0.80m、

合、

　⑤　装　飾（第５図）

　装飾は、

　後室壁の小口面は、

も塗られていた可能性が高い。顔料は明確にしていない。

　石屋形奥壁には、

ていると思われる。左側の円文は直径17㎝の整った円形で、

どを赤色顔料で塗っている。円文線刻の上部内側には、

はやや不整円形で、

て確認できる程度の残存状況で、

があり、

奥壁のキャンバスを上下に区分していると考えられる。

　奥壁の上半分は、

せない。また下半分の三角文１ヵ所と菱形文１ヵ所には白色顔料が確認でき、

のうち、

いては、

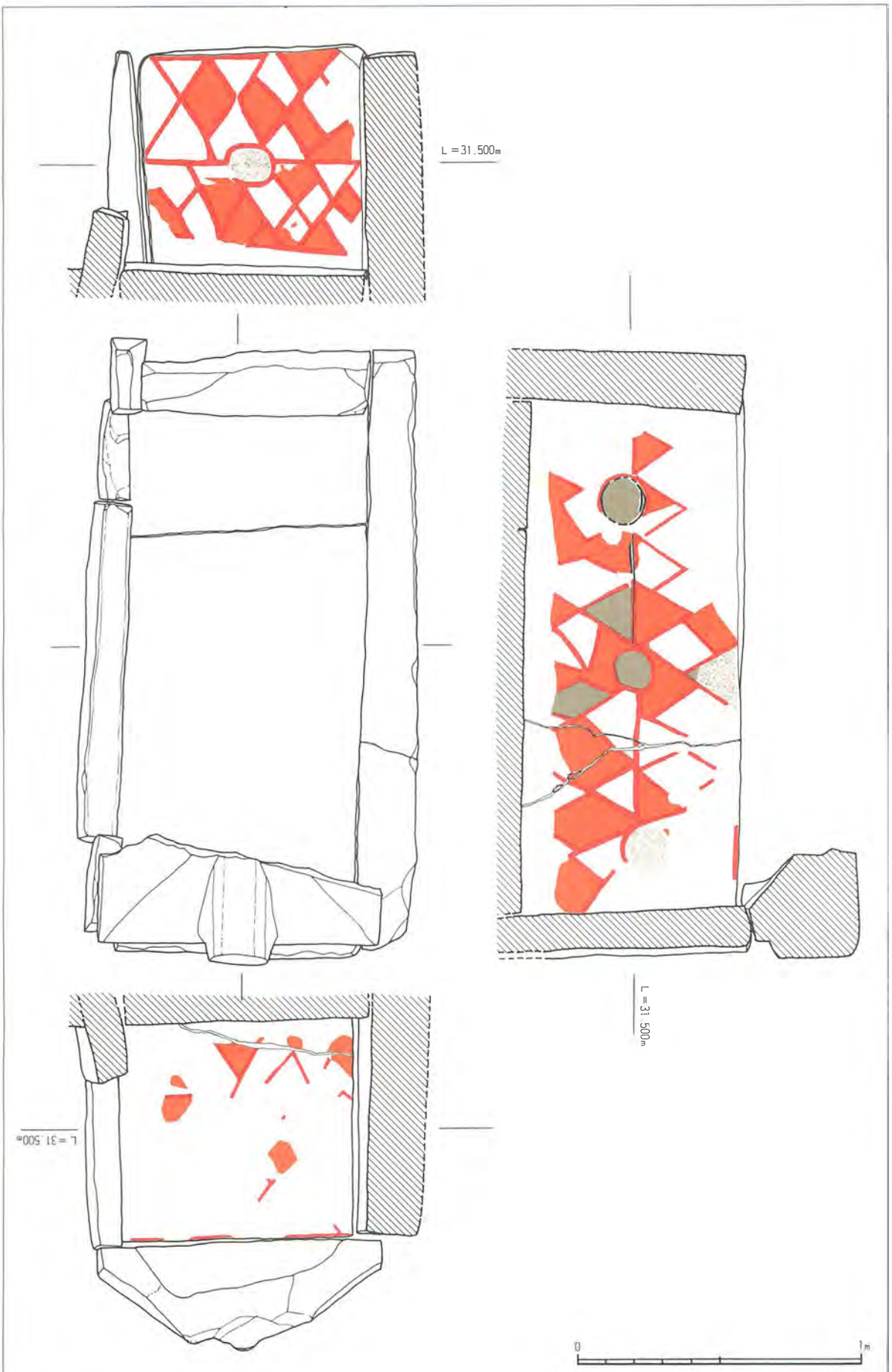
の箇所にも同様に見られる技法で、

　左壁も、

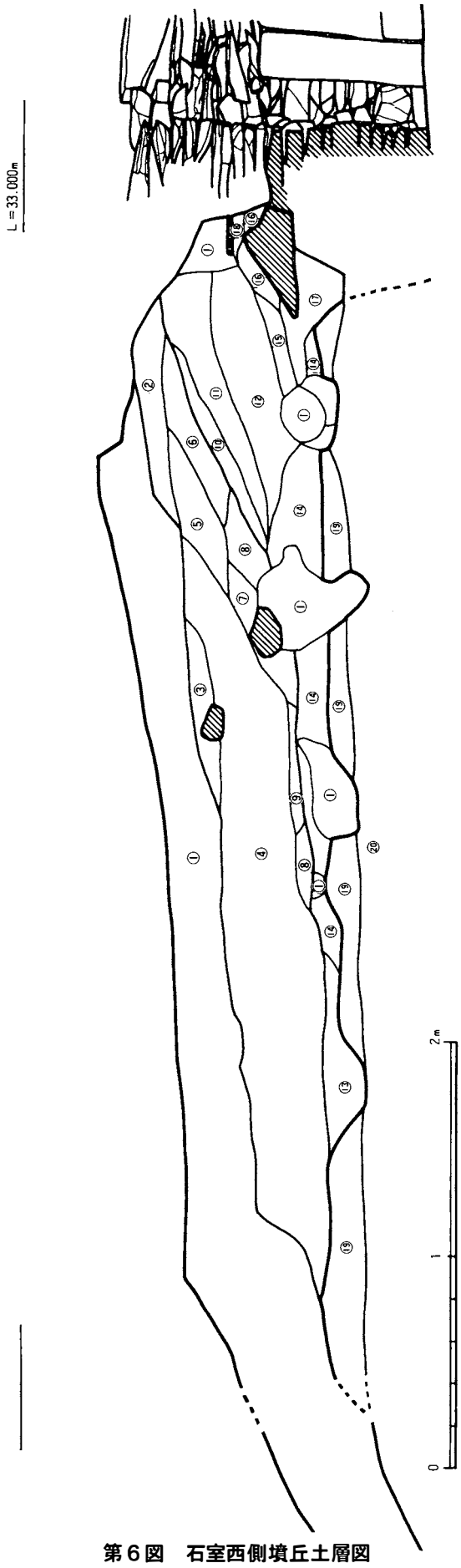
配している。中央の円文は奥壁の例から白色であったと推定される。

　右壁は残存状態が３面の中で最も悪く、

きる。左壁と同様な文様構成であったと考えたい。



第５図　石屋形実測図



第６図　石室西側墳丘土層図

３　盛土と地山整形（第６・７図）

盛土調査は石室の横断軸に沿って、
側に観察面を設け調査を行った。東側については、
保護施設建設のため盛土を除去し、
と地山整形の確認を行い、
を設定し、盛

西側トレンチ（第６図）は石室から西側の墳丘左くびれ部にかけて設定したもので、
石室脇の0.80mであった。旧地表の黒色土のレベルは石室脇の最高部で31.56mで、
かに傾斜して下がっていく。盛土は石室側から左下がりに盛られており、
は、
な盛り方である。地山整形の落ち込みラインは石室左側壁から約0.90m付近で検出している。

東側の盛土観察ラインは、
よい部分を断ち割る結果となった。標高31.56mの旧表土（黒色土）上に、
察できる。（第７図）

第１段階は、
右（東）上方に盛り上げており29層に細分できた。

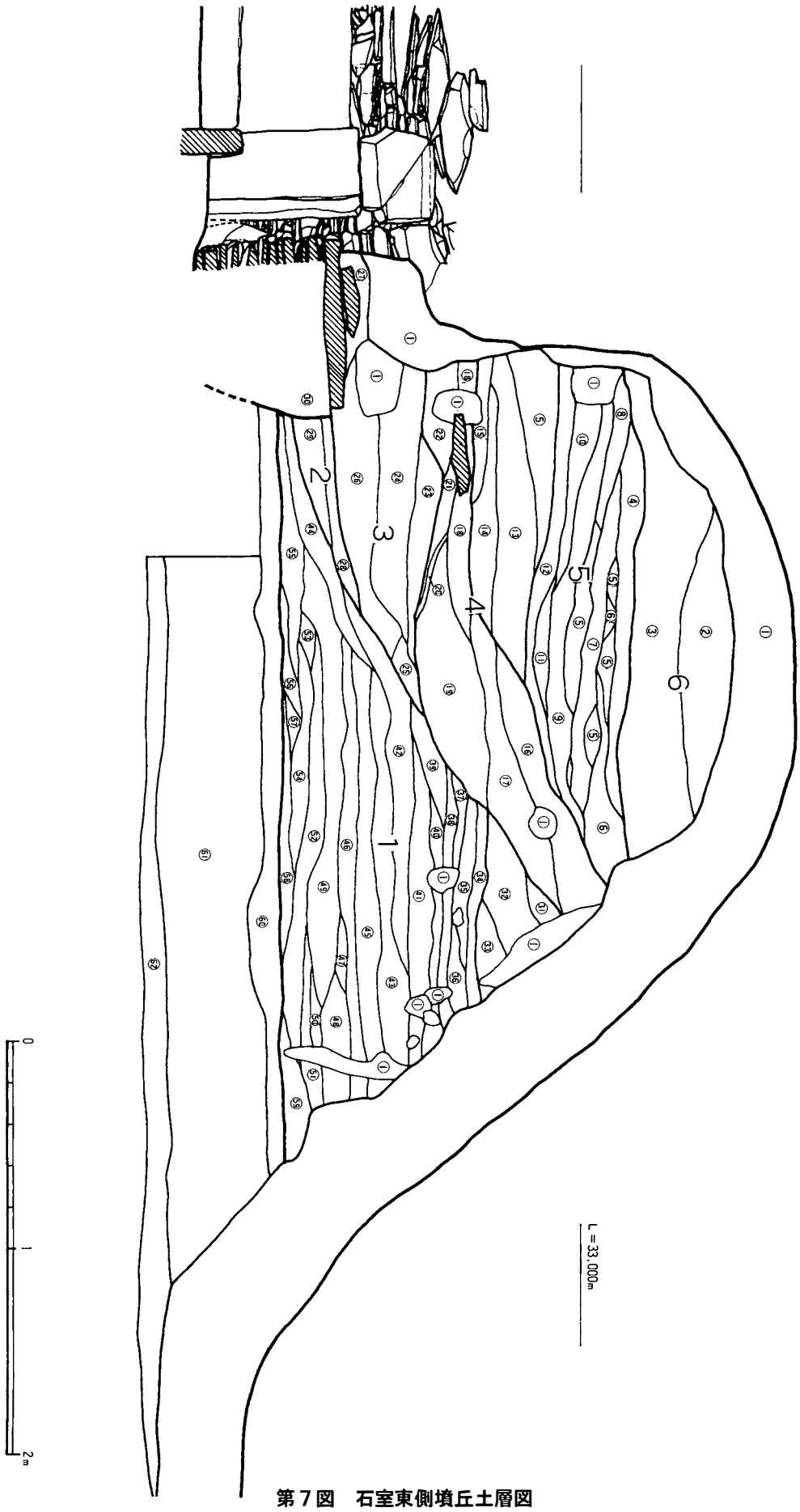
次に第２段階の盛土である淡黄色粘性砂質土を石室側に0.20mほど盛った時点で、
２mほどの位置で石室の掘り方を掘り込んでいる。

この掘り方は、
で面的に検出しており、
ぼ平行に辿ることができ、
り羨道部の側壁部分で終結する。

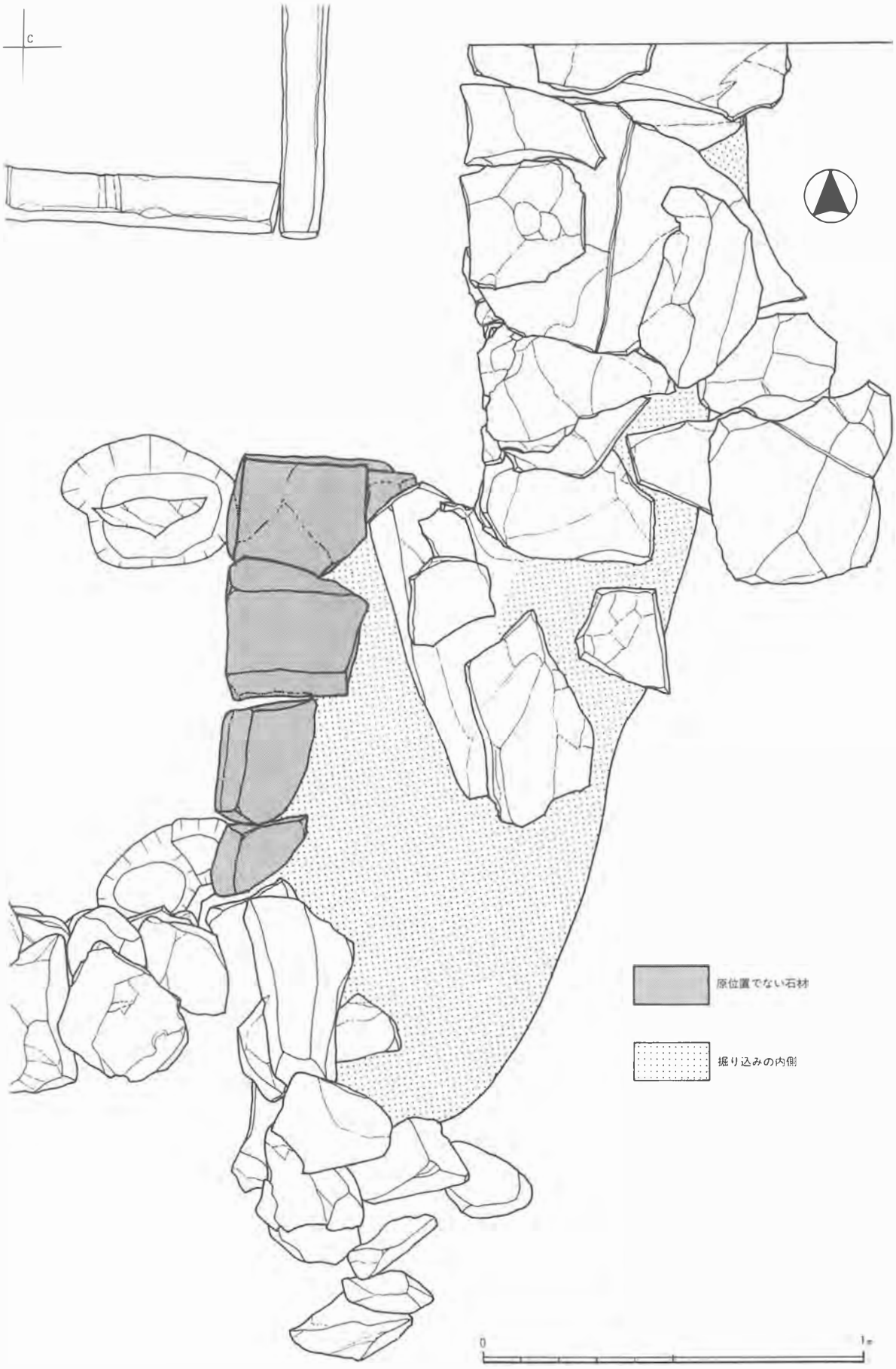
この掘り込み面より上層には、
盛土である淡黄色粘性砂質土を、
ると大きな単位で盛り、
を半分ほど埋めて石室側に平坦面を形成している。

第４段階では、
は平坦に、
質土を盛っている。

第５段階になると、
じ淡黄砂質土中心で、
と変わらないが、この土層中で最も硬くしまった単位である。特に上半分ほどは所々に黒色土を混入して、



第７図　石室東側墳丘土層図

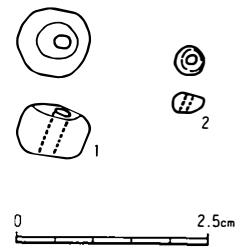


第８図　石室南東盛土除去後平面図

い。第４段階の上面の標高は33.09m～33.15mで、こ
せたと思われ、
　第６段階になると、
　当然のことであるが、
は逆転している。

４　出土遺物（第９図）

１は、
もので、
２は、
約１㎜を測り、



第９図　遺物実測図

第２節　周濠の調査

１　トレンチの設定について（第10図）

　周濠の調査は、
後円部周辺で、
レンチを再度掘り下げ、
土層の調査を行った。
　周濠検出状況と以前のトレンチ調査を踏まえて、
ンチを設定するとともに、
（主軸右側）にトレンチを設定し、
上層の残存状況が良好で周濠の範囲が面的に捉え難いため、
で掘り下げることにした。
　今回のトレンチ名については、
　以下、周

２　くびれ部

　くびれ部は墳丘主軸の左右とも面的に検出することができたが、
　主軸左側は全般的に後世の削平を受けており、
方部ラインに転換する検出ラインの角度は外側で約150度、
　主軸右側については、

⑴　**Ａトレンチ**（第11図）

　Ａトレンチは墳丘主軸右側のくびれ部に設定したトレンチである。墳丘の周囲の他の箇所からすると著しい攪乱を受けており、
～⑤）と残存部12層（⑥～⑰）に分けることができた。南側は特に攪乱が激しく、
る。（道路と思われる攪乱であるが、
　①黒褐色土（硬くしまりがある）
　②黄褐色土（ロームブロック、
　③黒褐色土（硬くしまりがあり中央部上面硬化）
　④黒褐色土（しまりに欠け③よりやや暗い）

⑤黒褐色土（やや硬いがしまりに欠ける）

⑥黒褐色土（硬くしまりがあり１～３㎝大の小石を少量含む）

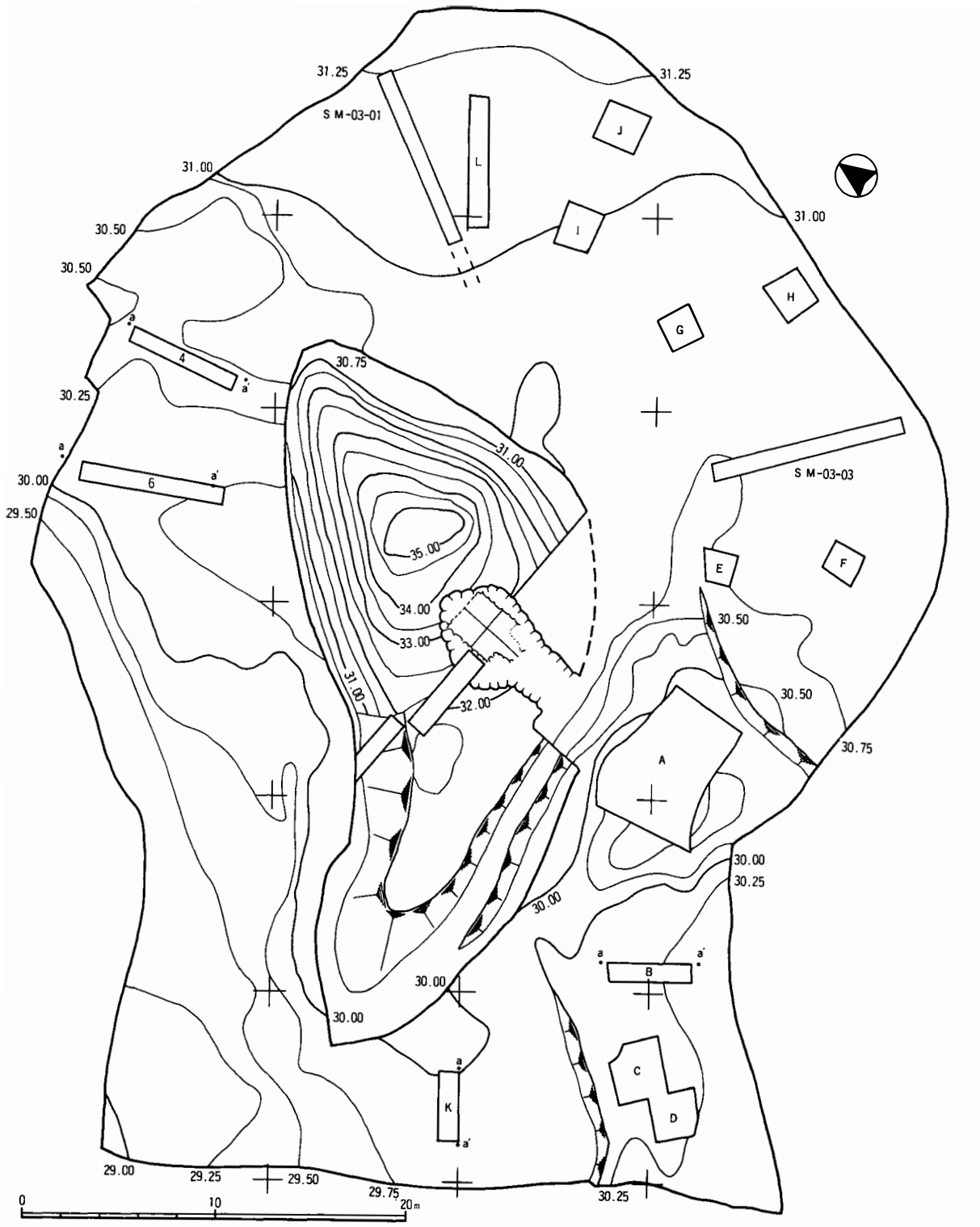
⑦黒褐色土（硬いがしまりに欠け１～５㎝大の小石を多量に含む）

⑧黒褐色土（硬くややしまりがあり⑦と同様の小石を⑦よりやや少ない程度に含む）

⑨黒褐色土（しまりはあるがやや硬さに欠け１㎝大の小石を少量含み⑩よりやや明るい）

⑩黒褐色土（⑨と同質だがやや暗い）

⑪黒褐色土（⑨とほぼ同質、



第10図　トレンチ配置図

⑫黒褐色土（やや硬さとしまりに欠け砂と１cm大の小石を少量、

⑬黒褐色土（やや硬さとしまりに欠け１cm大の小石をごく少量含む）

⑭黒褐色土（やや硬さに欠け小石をほとんど含まない）

⑮黒褐色土（硬いがしまりに欠け１～３cm大の小石と地山崩壊土の砂礫を少量含む）

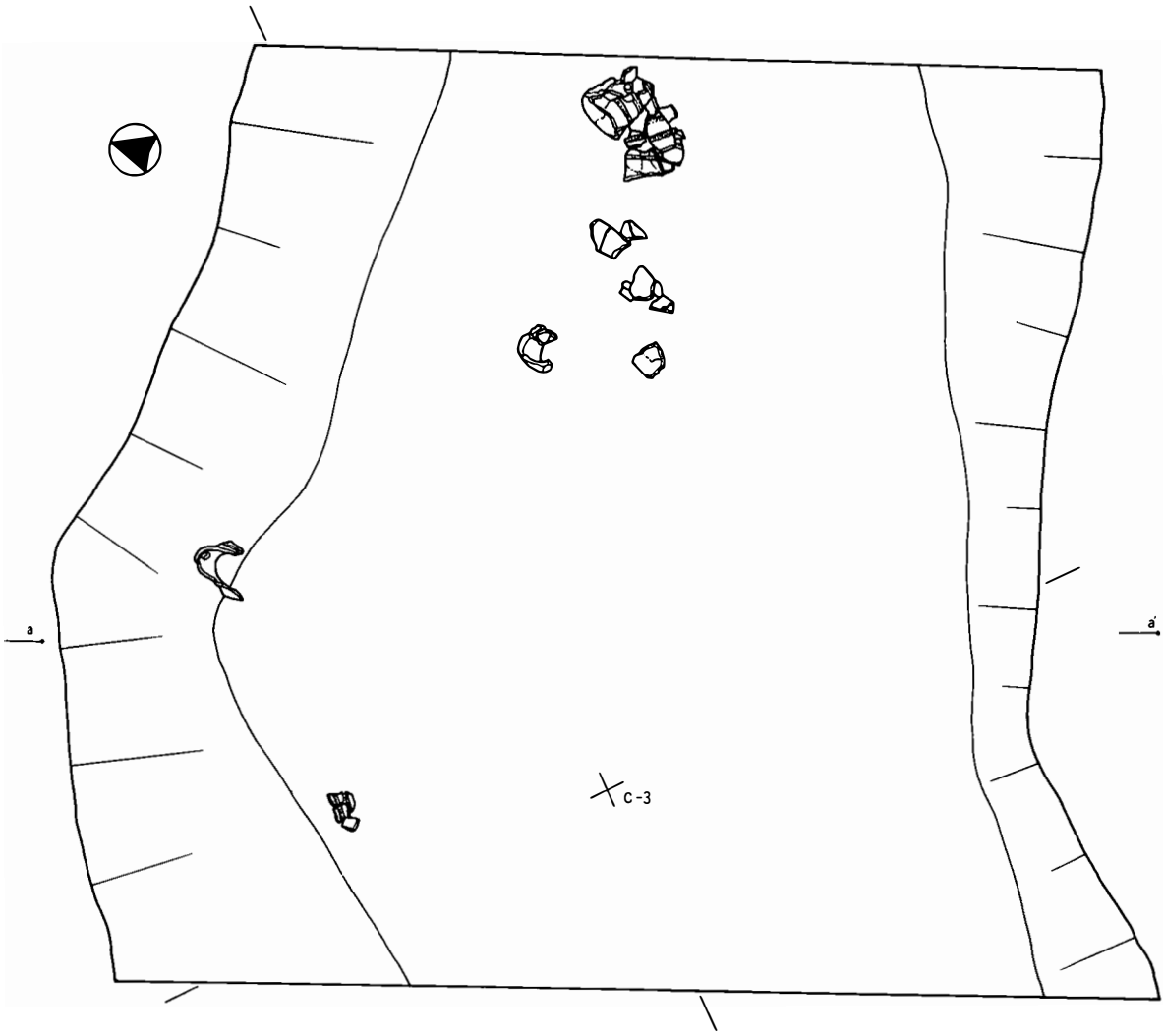
⑯黒褐色土（硬いがややしまりに欠け１～５cm大の小石を少量含む）

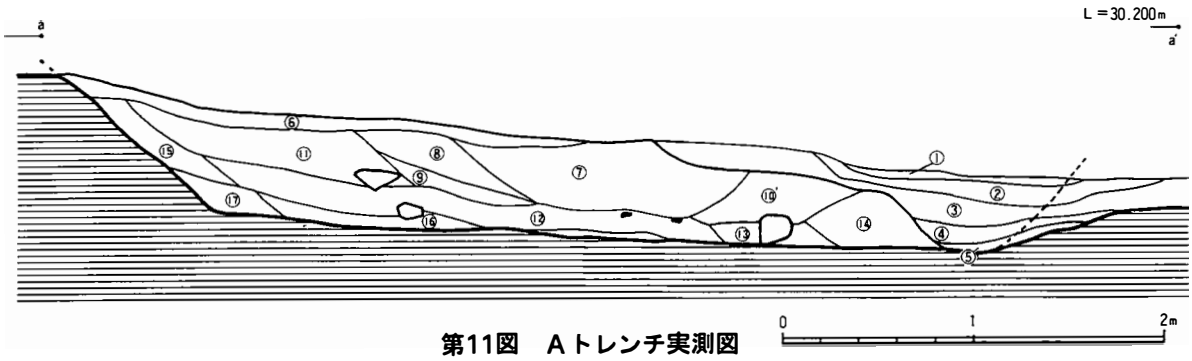
⑰黒褐色土（地山崩壊土の砂礫を多量に含む）

墳丘側は、

で見ると、

また、





第11図　Ａトレンチ実測図

辿ることができる。周濠の傾斜は外側が明確でないが、

くびれ部の確認幅は、

出土遺物は円筒埴輪のみで、

した埴輪は基底面より概ね10cm程浮いた状態で、

３　後円部（４号・６号・Ｌ・Ｅ～Ｊトレンチ）

後円部についても、

後円部の周囲には、

トレンチで周濠の上場が明確になる面まで掘り下げた。前述したように４号・６号トレンチは56年度調査のトレンチを完掘したもので、

ある。

⑴　**４号トレンチ**（第12図）

４号トレンチは検出面から基底部までの深さが、

けることができた。

①暗黒褐色土－硬くしまりがあり、　　５cm大の小石を少量含む。

②黒褐色土　－硬いがややしまりに欠け、

③黒褐色土　－硬いがややしまりに欠け、

④黒褐色土　－硬くしまりがあり、　　２cm大の小石を少量含む。

⑤黒褐色土　－硬くしまりがあり④より小石の含有が多い。

⑥⑦黒褐色土－⑦がやや明るいが大差はなく、し

⑧黒褐色土　－硬いがしまりに欠け、

⑨黒褐色土　－しまりはあるが硬さに欠け、

⑩黒褐色土　－⑧より暗く硬いがしまりに欠け、

⑪黒褐色土　－硬さに欠けるがしまりがあり、

⑫黒褐色土　－⑨に地山の黄色砂礫の崩壊土を少量含む。

⑬黄色砂礫土－地山崩壊土のブロック。

⑭黒褐色土　－硬いがしまりに欠け、

⑮黒褐色土　－⑪に地山崩壊土を多量に含む。

４号トレンチの軸での周濠の幅は、

して3.80ｍを測り、

周濠の傾斜は外側で約46度、

⑵　**６号トレンチ**（第12図）

６号トレンチは検出面から基底部までの深さが、

の堆積土は次の７層に分けることができた。

①暗褐色土　－硬くしまりがあり、　　２cm大の小石を少量含む。

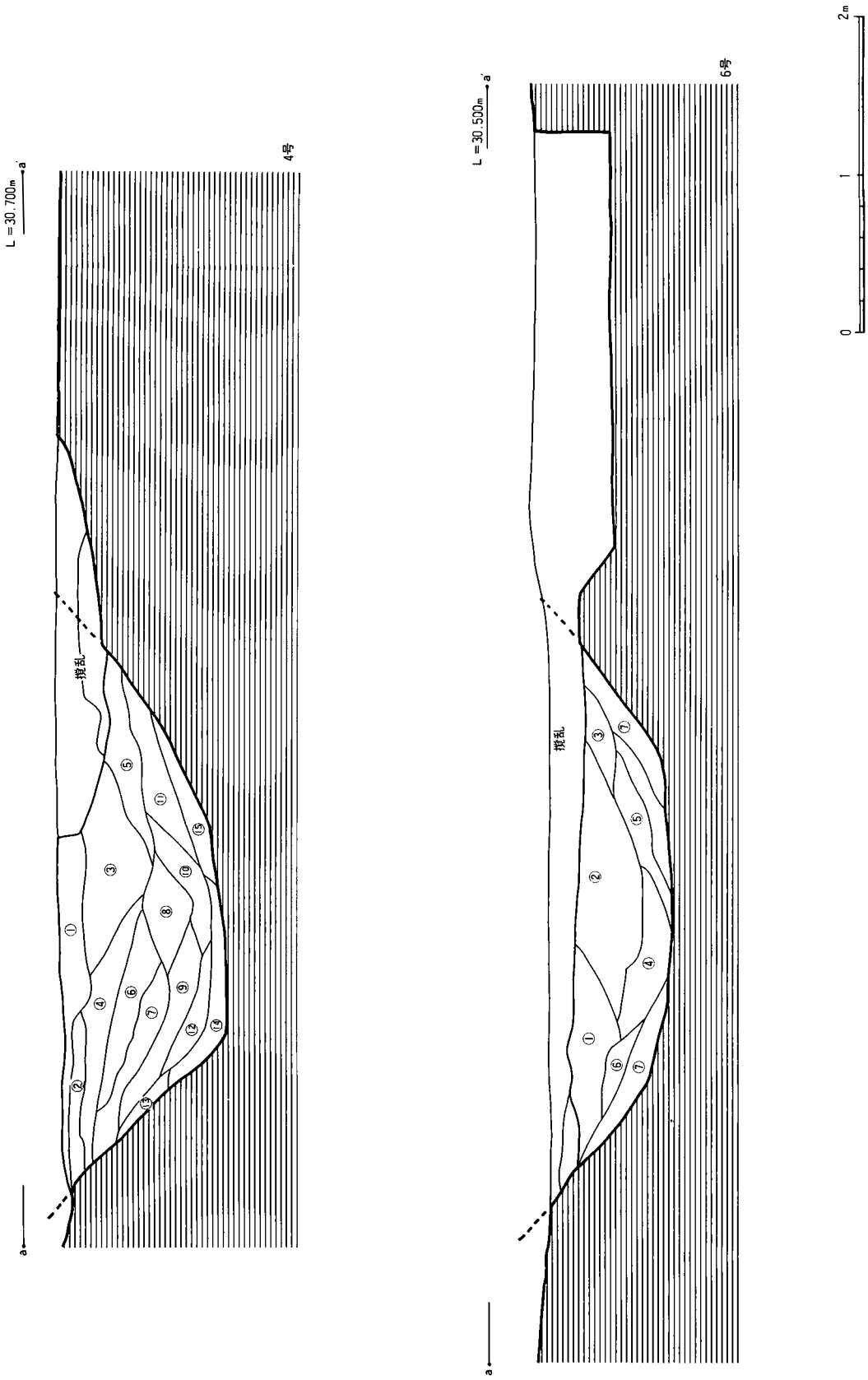
②黒褐色土　－硬くしまりがあり、　　５cm大の小石と埴輪細片を多く含む。

③黒褐色土　－硬くしまりがあり、

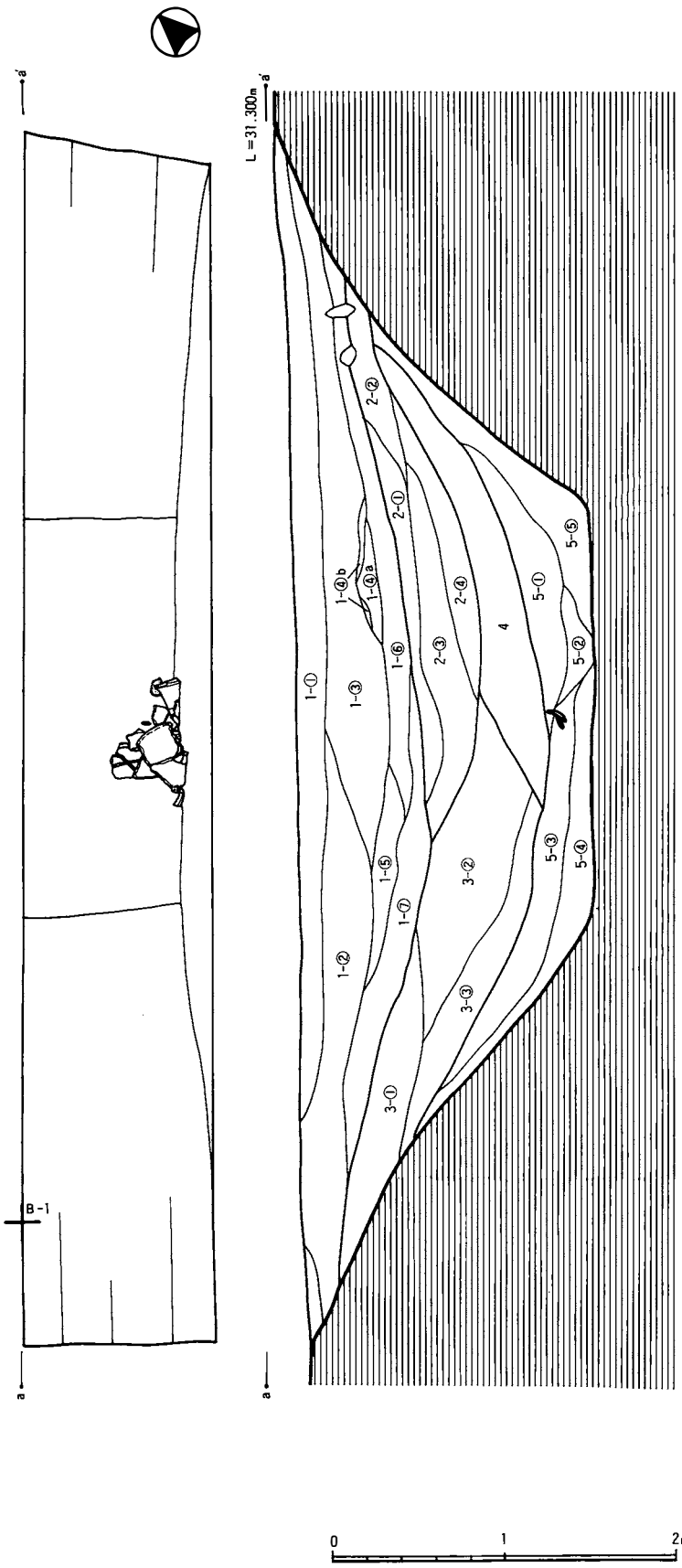
④黒褐色土　－硬いがしまりに欠け、

⑤黒褐色土　－硬くしまりがあり、

⑥黒褐色土　－硬くしまりがあり、　　２cm大の小石を少量含む。



第12図　４号・６号トレンチ土層図



第13図　Ｌトレンチ実測図

⑦暗黄褐色土－地山の黄色砂礫層の崩壊土を多量に含む。

６号トレンチの軸での周濠の幅は検出面では3.30ｍを測り、
を測る。また、
約39度、

⑶　Ｌトレンチ（第13図）

Ｌトレンチは今回設定したトレンチの中で、
検出面から基底部までの深さは最深部で1.74mを測り、
単位では５層に、
けることができた。堆積土の状況は次のとおりである。

１　暗黒褐色土

①　硬くしまりがあり焼土を粒子状に多く含む。

②　①と大差なく１cm大の小石を少量含む。

③　硬くしまりがあり焼土を粒子状に少量含む。

④　ａは硬さに欠けるがしまりがあり焼土を粒子状に少量含み、
褐色土を多く含み硬化している。

⑤　やや硬さに欠け焼土粒子を少量含み小石を含まない。

⑥　③よりやや暗く硬くしまりがあり焼土粒子をほとんど含まない。

⑦　②よりやや暗く硬くしまりがあり１cm大の小石を多く含む。

２　黒褐色土

①　やや硬さにかけるがしまりがあり１－⑥⑦が少量混じる。

②　硬くしまりがあり暗黄褐色土をブロック状に少量含む。

③　やや硬くしまりがあり１～２cm大の小石を少量含む。

④　硬くしまりがあり１～２cm大の小石をごく少量含む。

３　黒褐色土（２より暗い）

①　やや硬くしまりがあり、

②　硬いがややしまりに欠け、

③　②よりやや暗く硬いがやや閉まりに欠け、

４　黒褐色土

３より明るくやや硬さとしまりに欠け、

５　暗褐色土

①　４より暗く硬さとしまりに欠け、

②　①よりやや硬くしまりがあり、

③　やや硬いがしまりに欠け３－③より明るく、

④　やや硬いがしまりに欠け黄色砂層（地山崩壊土）を多く含む。

⑤　④より黄色砂層を多く含む。

平面図にある円筒埴輪は５層の墳丘側からの堆積土に含まれる。Ｌトレンチでの周濠の幅は、6.96m、基

周濠の傾斜は、

から検出面までは約25度を測り、

側でも、

やかになっている。

⑷　Ｅ～Ｊトレンチ

墳丘側のＥ・Ｇ・Ｉトレンチは、

に設定した。これにより、

また、

部分に周濠堆積土の上層と同様の黒色土が堆積し、

さらに外側に、

するために設定したのが、

ンは見かけのラインより約0.4～1.0m内側にあることが分かった。

４　前方部（Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｋトレンチ）

前方部も主軸左側は削平を受け、

受け、

⑴　Ｂトレンチ（第14図）

Ｂトレンチは前方部周濠で最も残存が良好な位置に設定したものである。検出面から基底部までの深さは最深部で1.24mを測り、

①黒色土　　－やや硬くしまりがあり埴輪細片と１㎝大の小石を少量含む。

②黒褐色土　－硬くしまりがあり１㎝大の小石と20～30㎝大の礫を少量含む。

③黒褐色土　－硬くしまりがあり小石をほとんど含まない。

④黒褐色土　－しまりはあるが硬さに欠けやや明るく１㎝大の小石を少量含む。

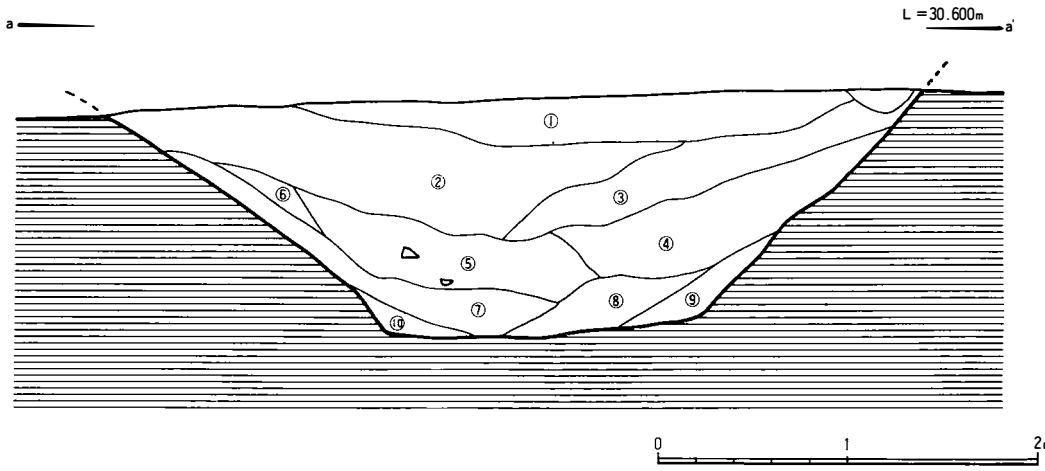
⑤黒褐色土　－硬くしまりがあり１㎝大の小石と10～20㎝大の礫を多く含む。

⑥黒褐色土　－硬くしまりがあり小石等をほとんど含まない。

⑦暗黄褐色土－硬くしまりがあり１㎝大の小石を多く含み地山崩壊土の黄色砂礫を少量含む。

⑧暗黄褐色土－硬さとしまりに欠け小石をほとんど含まない。

第２節　周濠の調査



第14図　Ｂトレンチ土層図

⑨暗黄褐色土－⑧に地山崩壊土の黄色砂礫を多く含む。

⑩暗黄褐色土－ほぼ地山崩壊土の黄色砂礫で占められる。

Ｂトレンチの軸での周濠の幅は、

約30度、

⑵　**Ｃ・Ｄトレンチ**（第15図）

Ｃ・Ｄトレンチは前方部周濠の右コーナー部（東側）に設定したもので、

外側（Ｄ）を各々トレンチで調査していたものを、

のである。このコーナー部もＢトレンチと同様に残存状態が良好な位置にある。

コーナーの形状は内側、

かに曲がるものである。

検出面から周濠基底部までの深さは、

ことができた。他のトレンチと同様に埴輪片は墳丘側からの堆積土に多く含まれる傾向にある。

ここでの周濠幅は、

2.14mを測ることができた。ちなみに、

また、　－ａ′・ｂ－ｂ′とも約

55度を測る。

周濠検出面でのコーナーの角度は外側で約91度、

ある。

①黒褐色土　－硬くしまりがあり、

般的には１～２㎝大の小石を少量含む。

②暗褐色土　－かなり硬くしまりがあり、

③暗褐色土　－硬いが②よりややしまりに欠け、

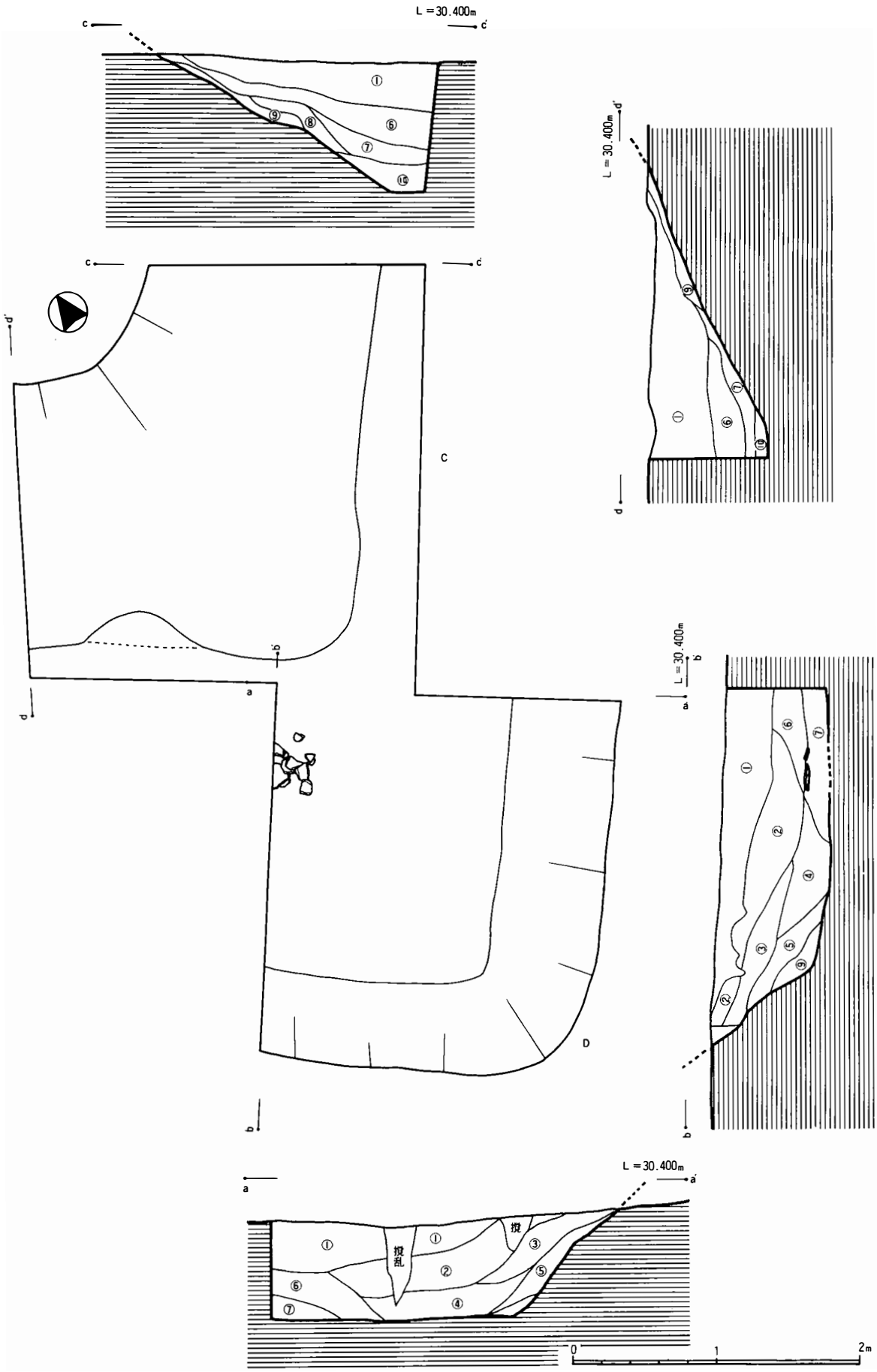
④暗褐色土　－②③よりやや暗く、

⑤暗褐色土　－硬さとしまりに欠け、

⑥黒褐色土　－硬くしまりがあり、

⑦暗褐色土　－硬くしまりがあり、　　㎝大の小石を少量含む。比較的大きめの埴輪片を少量含む。

⑧暗褐色土　－硬いがややしまりに欠け、



第15図　C・Dトレンチ実測図

⑨暗黄褐色土　地山（黄色砂礫層）の崩壊土で硬さとしまりに欠ける。

⑩暗褐色土　　やや硬さとしまりに欠け、

⑶　Ｋトレンチ（第16図）

Ｋトレンチは、　　・Ｄトレンチあたりからすると残存状況は良好でなく、

検出面から周濠基底部までの深さは、

た。

①黒褐色土　－硬くしまりがあり、

②黒褐色土　－硬いがややしまりに欠け、

③黒褐色土　－硬くしまりがあり、

④暗褐色土　－しまりはあるがやや硬さに欠け、

⑤黒褐色土　－しまりはあるがやや硬さに欠け１cm大の小石を少量含む。

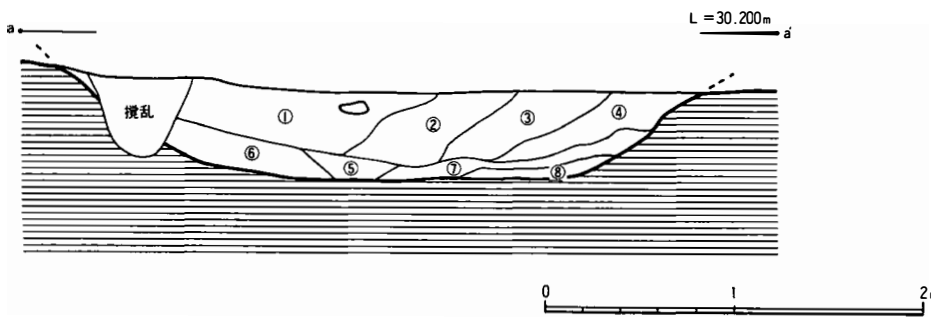
⑥⑦暗褐色土－⑥がやや明るいが大差はなく、

砂礫を少量含む。

⑧暗黄褐色土－ほぼ地山崩壊土の黄色砂礫で占められる。

周濠の幅は検出面で3.42m、基

度を測ることができた。



第16図　Ｋトレンチ土層図

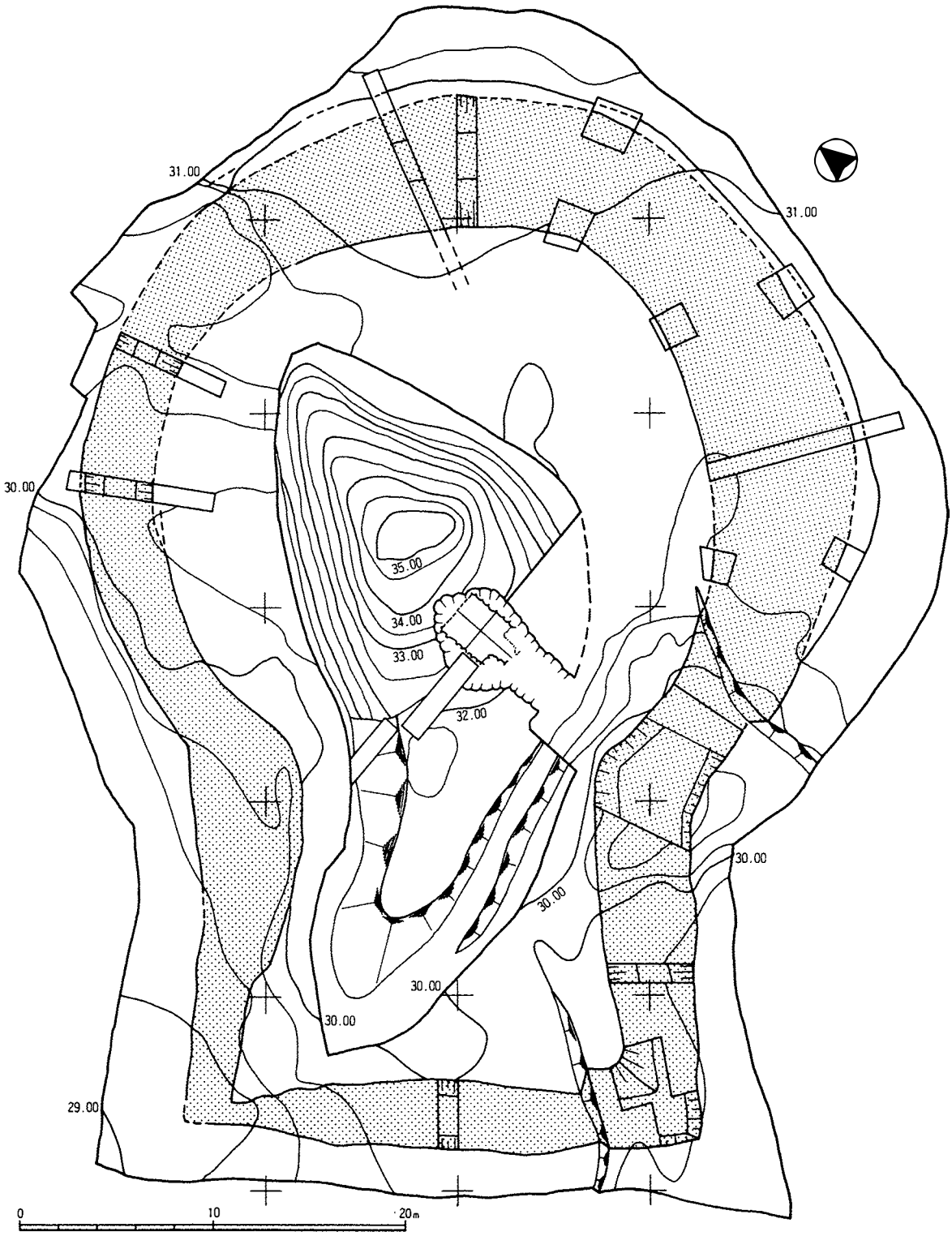
５　小結（第17図）

以上、

①全　　長	約54.28m
②墳丘全長	約43.92m
③後円部直径	約29.50m
④後円部直径（周濠含）	約40.58m
⑤くびれ部幅	約16.06m
⑥くびれ部幅（周濠含）	計測不可
⑦前方部幅	計測不可
⑧前方部幅　（周濠含）	計測不可

⑥⑦⑧については、

する。



第17図　塚坊主古墳平面図

第２節　周濠の調査

６　出土遺物

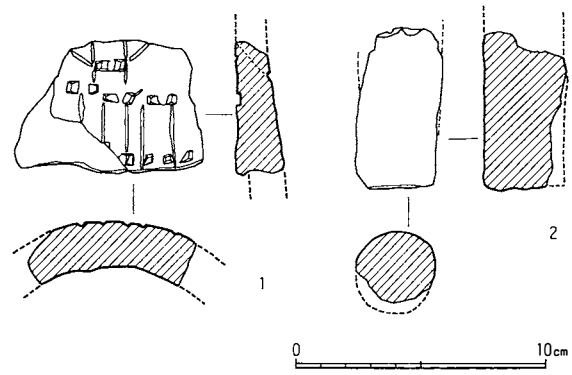
⑴　形象埴輪（第18図）

１は、

２本を単位とした刺突と沈線を組み合わせて施文している。断面の形状はゆるい弧状となる。色調は橙色で焼成は良好。胎土は砂粒を多量に含む。

２は、

れる。色調は明赤褐色で焼成は良好である。胎土は円筒埴輪に比すと砂粒がやや多い。



第18図　遺物実測図

⑵　円筒埴輪（第19・20図）

口縁部片には、

部、

め、

【形状】

今回の調査では、

古墳の円筒埴輪の全体像を推定することができる。口縁部が開く円筒形を呈し、胴

やや開くものとある。タガは４条。上から１条目と２条目、

っている。各段毎の透孔は直交するように配されている。口径25～31cm、底

きめとやや小さめの２つのサイズがあると考えられる。

口縁部の形には、

がある。他に大きく外反し口縁端部上面が正面を向くもの（Ⅳ）があるが、

であると思われる。

底部の形は、

【タガ】

タガの形や貼り付け方には、

かまぼこ形（ｂ）を呈するものと、

られる薄い粘土紐を貼りつけたもの等、

下辺とも強くナデが施され、

施され、

充分達していないもの（③）、

り、

【透孔】

基本的に略円形と思われるが、

いる。段毎の透孔の位置が近く、

【成形】

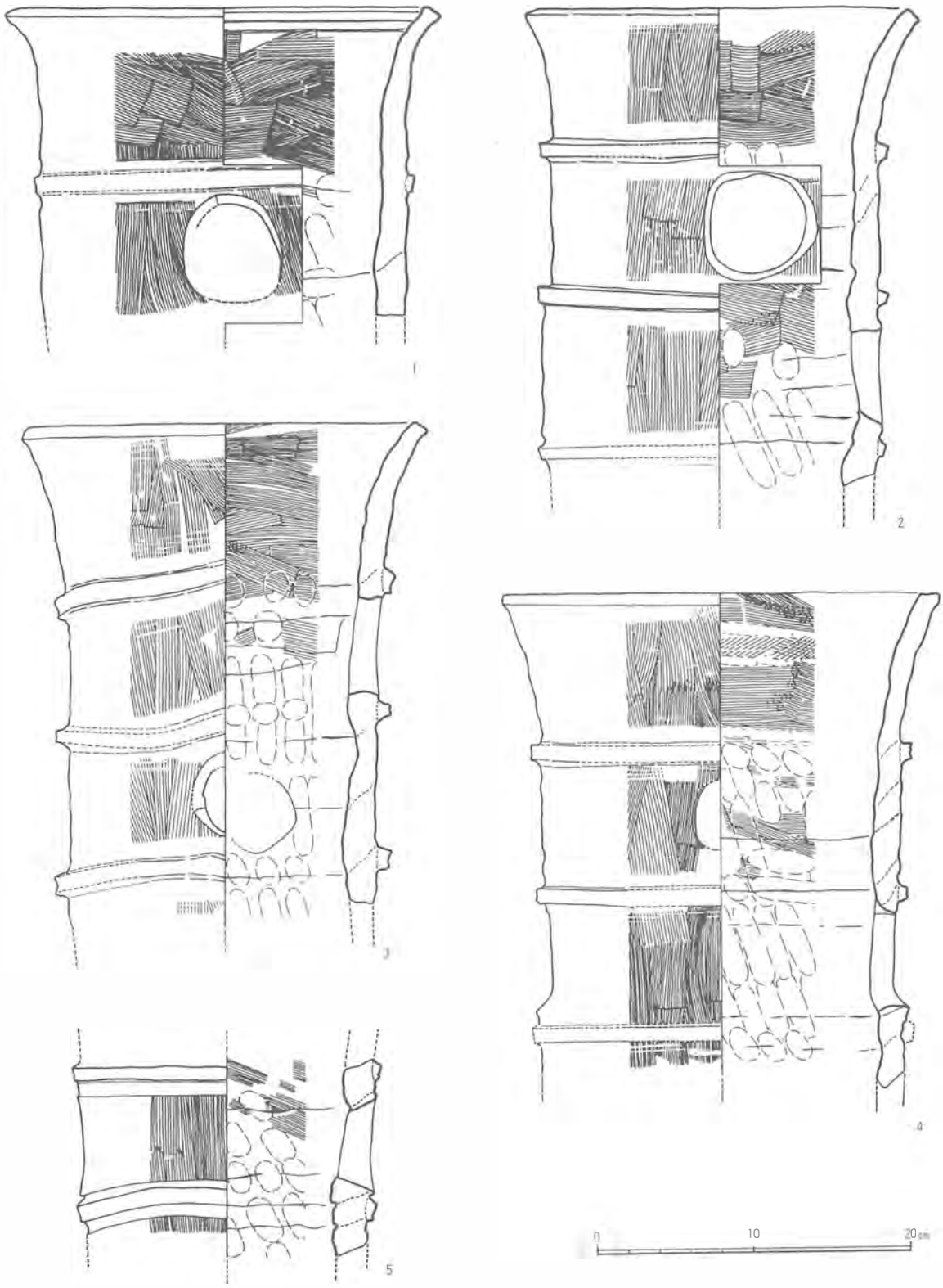
粘土紐を数枚貼り合わせて基部を成形している。底端部下面には棒状や、

【焼成・色調】

橙色で焼成の良いものが最も多く、

橙色を呈するものは、

る資料もある。



第19図　遺物実測図

第２節　周濠の調査

【胎土】

砂粒、

【調整等】

外器面は、

いる。内器面は、

ハケが施されているものもある。タガの裏側はナデ調整である。口縁端部上面と直下は外器面、

ナデが施されている。底部は、

以上、

異なもの２点を図化した。また、

第19図は胴部がほぼ直立する形のものである。

１は口縁部からそれに続く下１段までの部分である。口径は28.1㎝である。口縁部はかなり外反している。

口縁端部上面と直下は工具によって強くナデが施されており、

浅い凹線が巡っている。タガは幅が狭く、

いる。外器面は縦方向にハケ調整した後、

ケ目幅の異なる工具を用いたと思われる。内器面は、

２～４は、

２は口径25.3㎝、

である。口縁部は外反し、

は外側に突出している。タガはM字形を呈し、

は横方向のハケ調整で、

３は口径26.2㎝である。復元するとタガの位置はかなりゆがみ、

交しない位置にある。口縁部は外反している。タガはM字形を呈し、

タガの上辺、

ハケを施している。内器面の口縁部は横方向ハケ調整で、

４は口径28.1㎝、

ガはほぼ水平に突出したM字形を呈する。タガの上辺はナデを施しているが、

及ばないため、

斜方向にハケ調整している。内器面の口縁部とその下の段は横ハケを施し、

５は胴部で、

形を呈し、

ケ調整、

第20図１、

１は、

直下のナデは、

段の透孔の位置はほぼ直交している。タガは幅広く、

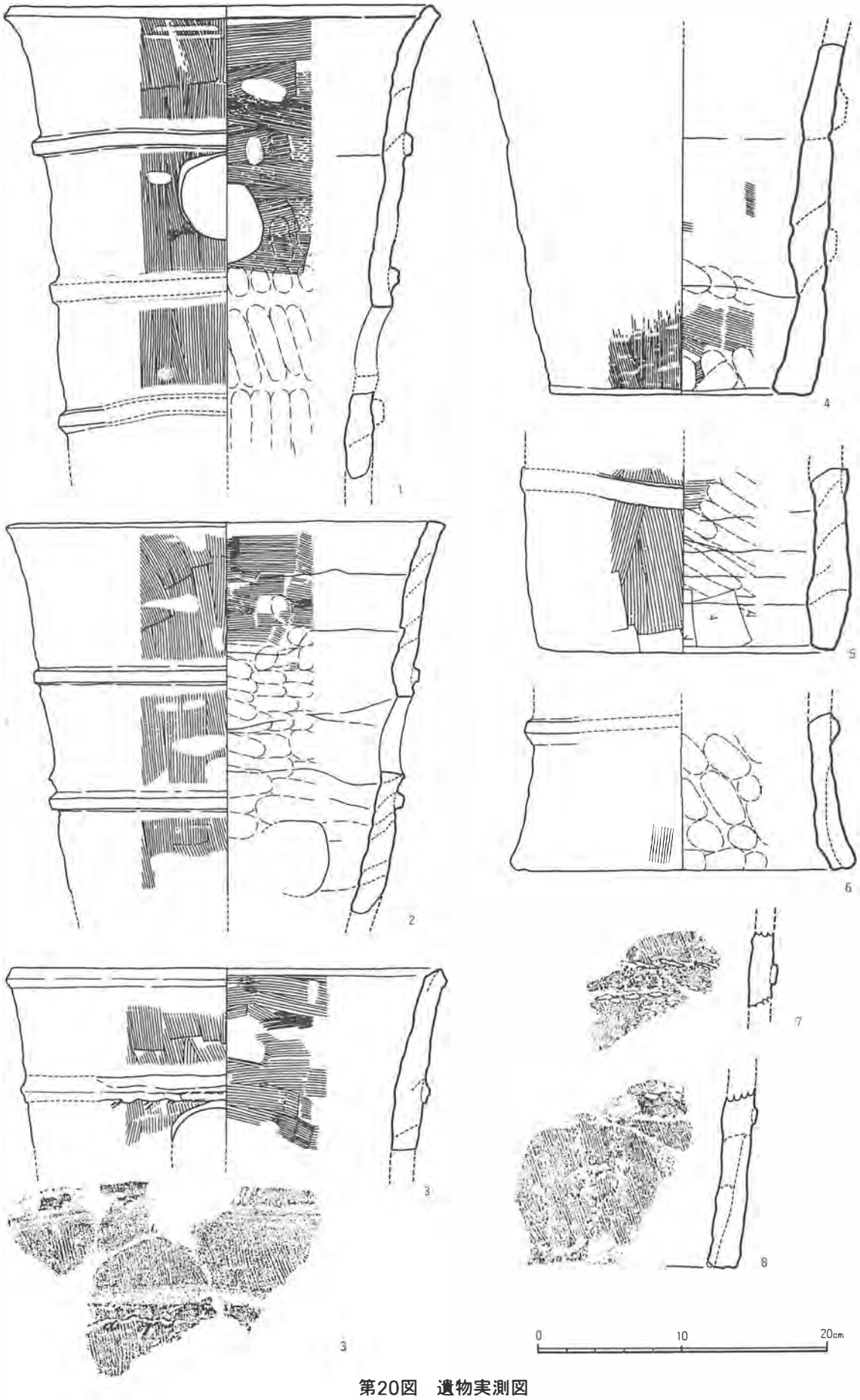
いる。外器面は縦方向のハケ調整で、

のハケ調整とナデで、

２は、

いている。口縁部直下のナデは弱い。口縁部はタガ間より長く、

は下向きの台形で、



第20図　遺物実測図

ハケ調整されている。内器面の口縁部は横方向のハケ調整、

色調は１・２とも淡黄橙色を呈す。

３は小辺である。復元口径は31.0cmでタガ１条と口縁部の下の段の上半まで残存している。タガは、

がごく狭い台形を呈し、

みで器面には達していない。タガの下辺は波打っており、

痕が認められ、

口縁部はさらにハケ調整を行っている。内器面は、

４・５・６は底部を含む破片である。４は内側に反り、

４は、

れているが、

分かる。端部の内器面は部分的に指による圧痕が認められるが、

タガは２条とも剥落しており、

５は、

のタガ部分は横方向にハケが施されていたことがわかる。端部は、

を行っている。残存している最下段タガは、

されておらず、

６は、

いが、

呈し、

７・８は、

る。

７は、

タガは薄い粘土紐を貼り付けたもので、

われる。そのため器面のタガと接する部分に、

８は、

器面は横方向に強いナデが施されているようである。タガはごく一部しか残っておらず、

付けており、

圧痕が並ぶのが認められる。

⑶　須恵器（第21・22図）

出土した須恵器のうち、

第21図１は、

内器面は鈍い橙色で、

頸部直下は、

ナデされている。また、

２～６は、

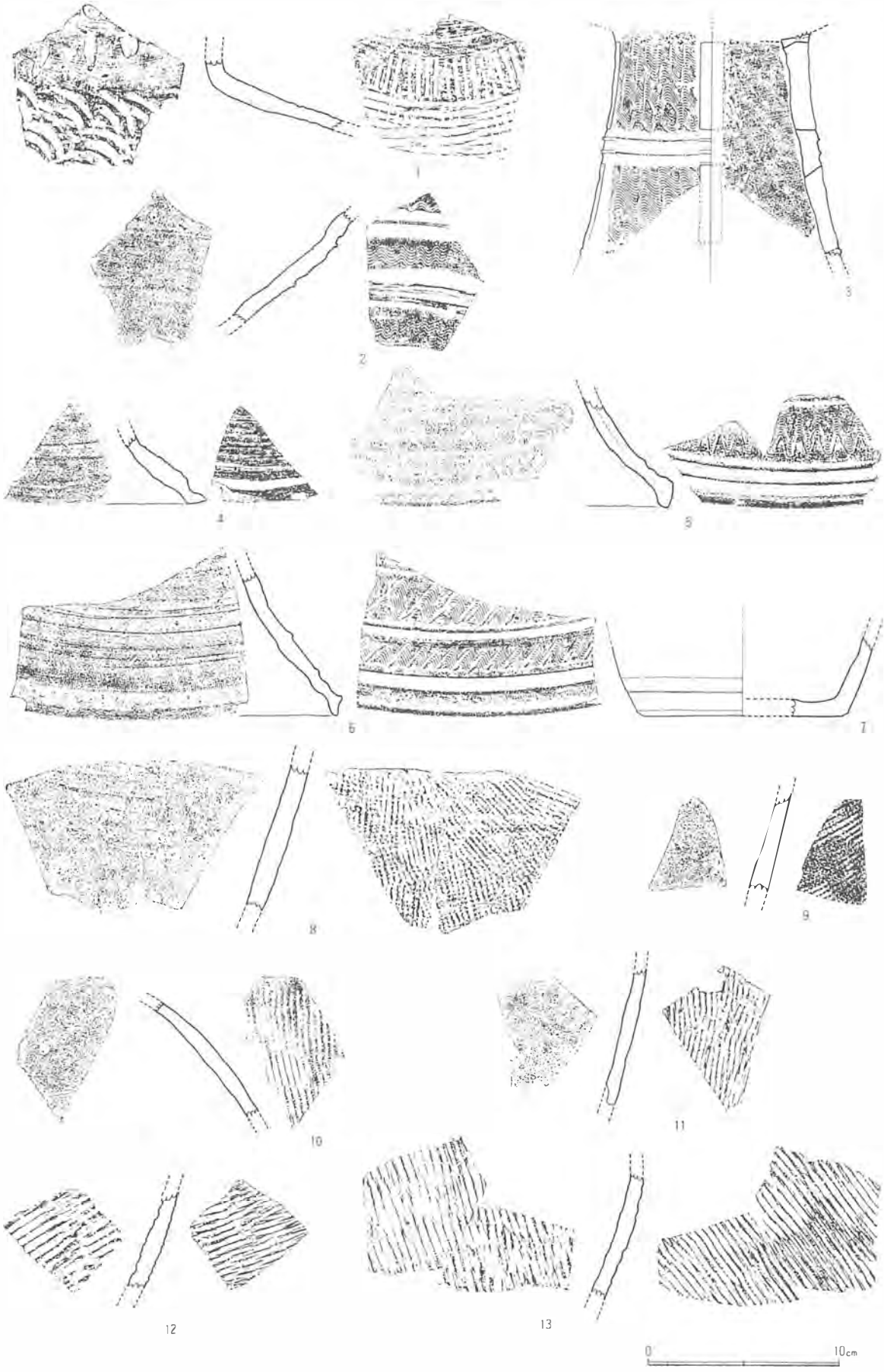
２は、

外器面には２本の小突帯が残存し、波

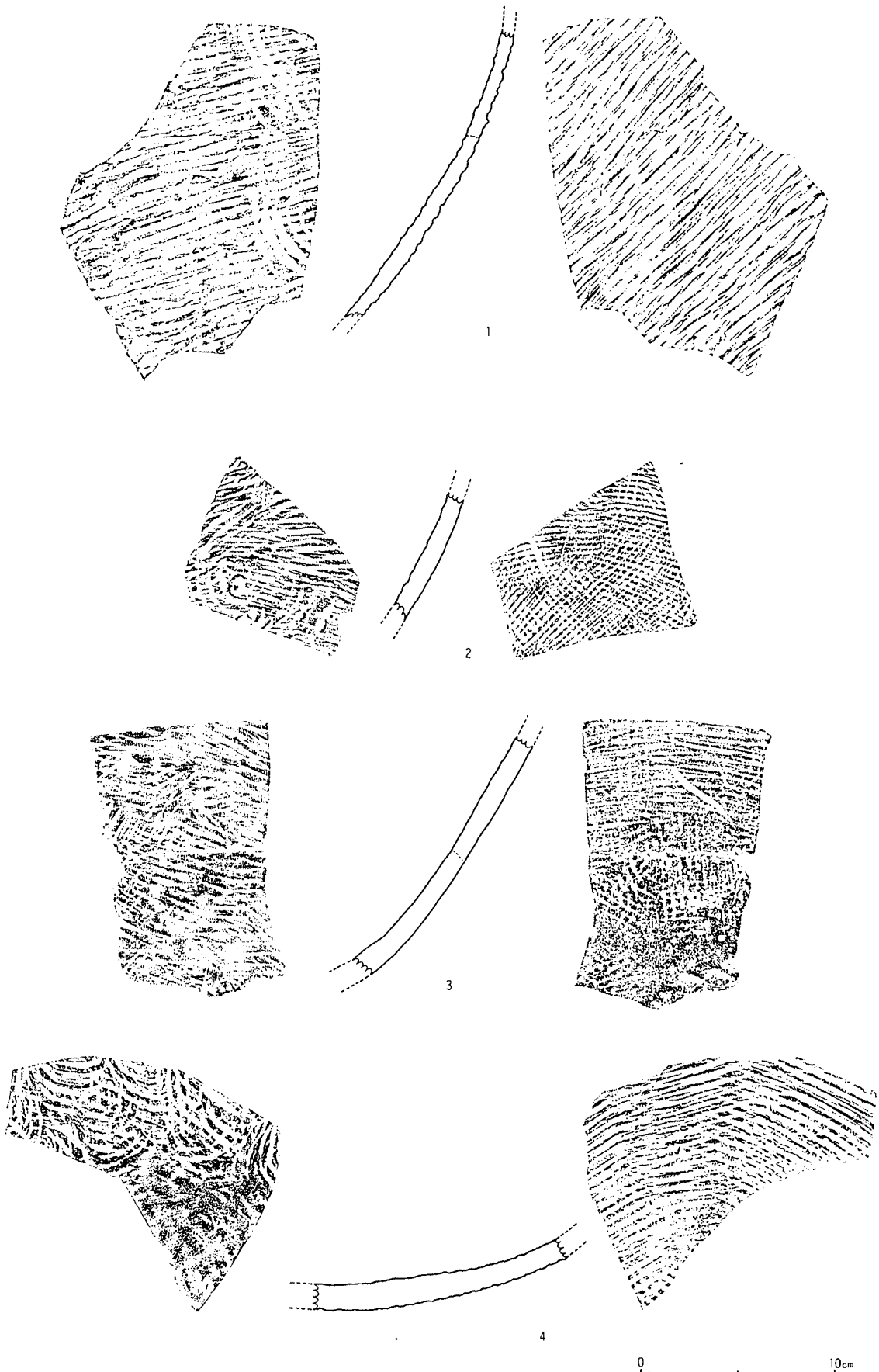
３は、

ブ灰色を呈し、

帯の上、



第21図　遺物実測図



第22図　遺物実測図

４～６は脚底部である。

４は、Ｇトレンチ上層の黒色土からの出土である。外器面は黒褐色、内器面は鈍い黄褐色を呈し、外器面の端部には自然釉がかかっており、焼成は良好である。外器面、内器面ともヨコナデされている。

５は、後円部東側の攪乱層より出土した。色調は外器面暗灰色、内器面灰色で焼成は良好である。外器面下段の２本１組の低い小突帯と中段の突帯の間は波状文が施されている。内器面はヨコナデされている。

６は、５トレンチ攪乱層から出土した。色調は灰色を呈し、焼成は良好堅緻である。端部接地面は尖っている。外器面は凹線と低い突帯を交互に巡らし、波状文を区切っている。内器面は、ヨコナデされている。

７は底部である。Ｇトレンチ上層の黒色土から出土した。平底で復元底径10.4cmを測り、色調は灰色を呈し焼成良好である。外器面、内器面ともヨコナデされ、外底部はナデ調整されており、端部は切り離しの際の箆により、段ができている。

８～13は胴部片である。

８・９は５トレンチ攪乱層より出土した。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。外器面は格子タタキを施し、内器面はナデ調整である。

10は、後円部東側の攪乱層の遺物である。色調は外器面オリーブ灰色、内器面暗オリーブ灰色を呈し、焼成は良い。外器面は平行タタキであるが、凹部にはタタキ板の木目がタタキ目と直交して残っている。また、内器面はナデ調整されている。

11も後円部東側攪乱層の遺物である。色調は外器面灰色、内器面オリーブ色で焼成は良好である。外器面は平行タタキを施し、内器面はナデを施している。

12は、残存墳丘西側の表土中の遺物である。色調は外器面が灰色、内器面が鈍い橙色を呈し、焼成は良い。外器面は一見平行タタキに見えるが、タタキ目に直交するように、凹部内に３条の凸部が走っているのが観察される。内器面は同心円タタキの後、平行タタキが施されている。

13は、後円部東側の攪乱層の遺物である。色調は外器面が灰色、内器面が鈍い黄橙色で焼成は良い。外器面は12に類似しており、平行タタキのタタキ目に直交するように凸部が走っている。条数も３本が単位となるようであるが、凸部はタタキの凹部内だけでなく、部分的に凸部にも認められる。内器面は普通の平行タタキである。

第22図１は胴部である。Ｇトレンチ上層の黒色土より出土した。外器面は暗青灰色、内器面はオリーブ灰色で焼成は良い。外器面の平行タタキは、幅広く深く鋭い。内器面は大きな同心円タタキを施し、更にタタキ目の幅広い平行タタキを施している。

２・３は、底部近くの胴部である。ともにＧトレンチ上層の黒色土から出土している。

２は、色調が灰色を呈し、焼成は良好である。外器面は平行タタキが施され、底部に近づくにつれ、タタキの方向が不定となる。内器面は同心円タタキの後、平行タタキを施し、最後に軽くナデ調整をしている。

３は、外器面の色調が鈍い黄橙色、内器面は黄橙色を呈す。内器面は赤彩されていたようである。また、焼成はあまり良好でない。外器面は浅く平行タタキを施し、底部近くはタタキが交差している。内器面も平行タタキであるが、タタキの方向にややばらつきがある。

４は底部で、丸底であると思われる。Ｅトレンチ上層の黒色土より出土した。色調は灰色を呈し、焼成は良い。外器面は底部中央から放射状に平行タタキを施している。内器面は同心円タタキで、内底部のタタキ痕はナデで消されている。

第３表　埴輪観察表(1)

NO	器種	出土地点	部位 口	部位 胴	部位 底	調整 外器面	調整 内器面	調整 ハケ	調整 口縁部	調整 底部	タガ (cm) 形態	タガ (cm) 幅	タガ (cm) 高さ	透孔 形態	透孔 その他	計測値 (cm) 口径	計測値 (cm) 底径	計測値 (cm) 器厚	色調	焼成	赤彩	備考
19-1	円	A	Ⅲ	○		ナナメ・タテハケ	ヨコハケ・ナデ	5～7	ナデ（ヘラ）		a-②	1.2	0.4	円		28.1		1.2～2.2	橙	○		
19-2	円	L	Ⅲ	○		タテハケ	ヨコハケ・ナデ	5～7	ナデ（ヘラ）		c-②	1.3～1.6	0.6～0.8	円	直交せず	25.3		1.4～2.2	橙	○		
19-3	円	A	Ⅲ	○		ナナメ・タテハケ	ヨコハケ・ナデ	5			c-①	1.3	0.6～0.9	円	直交せず	26.2		1.2～2.2	橙	○		
19-4	円	A	Ⅱ	○		タテハケ	ヨコハケ・ナデ	5～8			c-③	1.6	0.6	円		28.1		1.1～2.2	橙	○		タガ貼付前の凹線有
19-5	円	L		○		タテハケ	ナナメハケ・ナデ	6～7			c-①	1.5	0.5～0.6	円				2.2	橙	○		
20-1	円	A	Ⅲ	○		タテハケ	ヨコハケ・ナデ	5～8			a-②	1.7	0.5	円		30.6		1.3～1.9	淡黄橙	△		タガ貼付前の凹線有
20-2	円	L	Ⅰ	○		ナナメ・タテハケ	ヨコハケ・ナデ	5～7			a-②	1.6	0.5～0.7	円	直交せず	30.8		1.3～1.6	淡黄橙	○	△	
20-3	円	L	Ⅱ	○		タテハケ	ヨコハケ	5～6			d-⑤	1.6	0.4	円		31.0		1.6	橙	○	△	
20-4	円	B		○	B	タテハケ	ヨコハケ・ナデ	6		なし							18.4	2.1～3.0	淡黄橙	△		基部有り
20-5	円	A			C	タテハケ	ヨコハケ・ナデ	5		押圧・篦削り	d-④	1.8	0.4				20.6	3.0	鈍い橙	○		基部有り
20-6	円	S56T			A	タテハケ	ナデ	5		なし？	b-②	2.2	0.7				24.1	1.4～2.0	淡黄橙	△		基部有り
20-7	円	南くびれ		○		ナナメハケ	ナデ	5			d-④	1.5	0.4					1.4	橙	○		
20-8	円	E/G			B	タテハケ	ナデ	6			d-④	1.8	0.3					2.3	橙	○		
3	円	A	Ⅲ	○		タテハケ	ナデ	5			b-②	1.6	0.7	円				2.3	淡黄橙	△		タガ貼付前の凹線有
5	円	A	?			タテハケ	ヨコハケ	5			a-②	1.8	0.7	円				1.8	橙	○		
12	円	L	Ⅲ			タテハケ	ヨコハケ	5	ナデ									1.3	橙	○		
26	円	2	Ⅱ			タテハケ	ヨコハケ	6										1.7	橙	○		
28	円	A	Ⅲ			タテハケ	ヨコハケ	5										1.2	橙	○		
30	円	A	Ⅲ			タテハケ	ヨコハケ	5										1.6	橙	○		
33	円	一括	Ⅲ			?	?		ナデ									1.2	淡黄橙	△		
39	円	A2	Ⅱ			タテハケ・ナデ	ヨコハケ・ナデ	5										1.5	橙	○		
41	円	A	Ⅱ			タテハケ	ヨコハケ	4～7										1.5	橙	○		
43	円	A	Ⅱ			タテハケ	ヨコハケ	5										1.3	橙	○		
49	円	E	Ⅱ			ナナメハケ	ナナメハケ	5										1.3	橙	○		
50	円	A	Ⅱ			タテハケ	?	5										1.2	橙	○		
51	円	一括	Ⅲ			?	?		ナデ									1.2	淡黄橙	△		
52	円	A	Ⅱ			タテハケ	ヨコハケ	5										1.6	橙	○		
53	円	A	Ⅱ			ナナメハケ	ヨコハケ	8										1.3	橙	○		
54	円	A	Ⅲ			ナナメハケ	ヨコハケ	5	ナデ									1.4	橙	○		
55	円	A	Ⅲ			ナナメハケ	ハケ？	5	ナデ									1.3	橙	○		
56	円	A	Ⅲ			ナナメハケ	ヨコハケ	5	ナデ									1.4	橙	○		
57	円	A	Ⅱ			タテハケ	ヨコハケ	5～7										1.2	橙	○		
58	円	A	Ⅲ			タテハケ	ヨコハケ	?										0.8	橙	○		
59	円	A	Ⅲ			ナナメハケ	ナナメハケ	5	ナデ									1.4	橙	○		
62	円	A	Ⅱ			ナナメハケ	ヨコハケ	?										1.5	橙	○		
63	円	A	Ⅲ			ナナメハケ	ヨコハケ	5	ナデ									1.7	橙	○		
64	円	A	Ⅲ			タテハケ	ナデ	8	ナデ									1.6	橙	○		

第４表　埴輪観察表(2)

NO	器種	出土地点	部位			調整					タガ			透孔		計測値（cm）			色調	焼成	赤彩	備考
			口	胴	底	外器面	内器面	ハケ	口縁部	底部	形態	幅	高さ	形態	その他	口径	底径	器厚				
65	円	A	Ⅲ			ナナメハケ	ヨコハケ	5～6	ナデ									1.1	橙	○		
66	円	A	Ⅱ			ナナメハケ	ナナメハケ	5										1.3	橙	○		
1	円	A		○		タテハケ	ナデ	5			c-①	1.5	0.8	円				2.4	橙	○		
6	円	A		○		タテハケ	ヨコハケ・ナデ	5			d-③	1.9	0.4	円？				1.4	橙	○	△	
7	円	A		○		ナナメハケ	ヨコハケ・ナデ	5			a-①	1.7	0.7	円				1.8	橙	○		
8	円	L		○		ナナメハケ	ナデ	5～8			c-①	1.7	0.3	円				1.3	黄橙	◎		朝顔型？
9	円	A		○		タテハケ	ヨコハケ・ナデ	5			a-③	1.6	0.7					1.7	橙	○		
13	円	A		○		タテハケ	ナデ	5			c-？	1.8	0.7	円				1.5	橙	○		
14	円	A		○		タテハケ	ヨコハケ・ナデ	5			c-③	1.8	0.6					1.4	橙	○		
17	円	A		○		タテハケ	ナデ	5			a-③	1.3	0.8					1.3	橙	○		
18	円	A		○		タテハケ	ナデ	5			a-③	1.7	0.5	円				1.4	淡黄橙	△		
27	円	A		○		タテハケ	ナデ	5			c-③	1.9	0.4	円				1.2	橙	○		
29	円	A		○		タテハケ	ナデ	5			?-③							1.8	橙	○		
31	円	表採		○		タテハケ	ナデ	5			c-③	2.1	0.3～0.6					2.0	橙	○		
32	円	A		○		タテハケ	ナデ	5			c-③	1.8	0.3～0.6					1.8	橙	○		タガ上辺強ナデ下辺軽ナデ
34	円	2		○		タテハケ	ヨコハケ	5			c-③	2.0	0.8					1.8	橙	○		
36	円	A		○		タテハケ	ナデ	5			c-③	1.8	0.6					1.3	橙	○		
37	円	E		○		タテハケ	ヨコハケ	5～8			c-①	2.0	0.6					1.3	橙	○		
23	円	A		○		タテハケ	ナデ	7			a-③	1.7	0.6	円				1.5	淡黄橙	△		
42	円	A		○		タテハケ	ナナメハケ・ナデ	?			c-①	1.4	0.5					1.4	橙	○		
45	円	L		○		タテハケ	ナデ	5～6			c-①	1.0	0.3	円				1.3	黄橙	○		朝顔型？
47	円	A		○		タテハケ	ヨコハケ・ナデ	5			c-③	2.3	0.7	円				2.1	橙	○		
61	円	A		○		ナナメハケ	ナデ	5～8			a-②	1.2	0.6					1.5	橙	○		
4	円	A			B	タテハケ	ナデ	5		押圧・篦削り	a-⑤	1.7	0.8					2.3	橙	○		基部無
15	円	S56T			A	タテハケ	ナデ	6										1.4	淡黄橙	△		
19	円	E			A	タテハケ	ナデ	5～7		押圧・ナデ	d-④	2.0	0.6					1.8	橙	○		
20	円	A			A		ナデ											1.8	橙	○		
21	円	A			A		ナデ			篦削り									橙	○		基部有
22	円	A			C	タテハケ	ナデ	6		押圧・ナデ								2.3	橙	○		基部有
40	円	E			C	タテハケ	ヨコハケ	6		なし								2.3	橙	○		基部有
44	円	A			C	ナナメハケ	ナデ	6		押圧・篦削り								2.3	橙	○		基部有
48	円	A			B	タテハケ	ナデ	6		なし								2.1	淡黄橙	△		
11	朝	A	Ⅳ			ナナメハケ	ナナメハケ	4			a-③	2.3	0.9					1.6	淡黄橙	△	△	
16	朝	A				ナナメハケ	ナナメハケ	?			d-①	1.8	1.4					1.7	橙	○		頸部無
35	朝	L		○		ナナメハケ	ナデ	7			c-①	1.6	0.6					1.3	黄橙	◎		
38	朝	L				ナナメハケ	ナナメハケ	5～7			c-①	1.8	0.5					1.4	橙	○		花状部

第５表　第６・７図土層解説表

石室東側

段階	層番号	土層の状況	
	1	表土、撹乱土	表土及び樹根等による撹乱
6	2	淡黄褐色砂質土	硬くしまりがあり、小石を多く含む。
	3	淡黄褐色砂質土	硬くしまりがあり、２よりかなり明るい。
5	4	淡黄褐色砂質土	やや小石を含み、密にしまり硬い。
	5	黒褐色土	密に硬くしまり、小石を僅かに含む。５段階を中心に各所に見られる。
	6	淡黄褐色砂質土	小石を僅かに含み、密にしまり硬い。
	7	淡黄褐色砂質土	小石を僅かに含み、密にしまり硬い。
	8	淡黄褐色砂質土	小石を僅かに含み、密にしまり硬い。
	9	淡黄褐色砂質土	極めて密に硬くしまり、小石を僅かに含む。
	10	淡黄褐色砂質土	９と大差ないが、やや暗く小石を僅かに含む。
	11	淡黄褐色砂質土	10と大差ないが、小石をほとんど含まない。
	12	淡黄褐色砂質土	密に硬くしまり、小石を少量含む。
4	13	淡黄褐色砂質土	小石を多く含み、硬くしまりがある。
	14	淡黄褐色砂質土	13とほぼ同じだが、やや暗い。
	15	淡黄褐色砂質土	小石を多量に含み、硬くしまる。
	16	淡黄色砂質土	硬くしまり、小石をごく少量含む。
	17	淡黄色砂質土	硬くしまり、小石を少量含む。黒褐色土が3cm大のブロック状に混じる。
	18	淡黄色砂質土	硬くしまり、小石を多く含む。
	19	淡黄色砂質土	やや硬さに欠け、小石を少量含む。
	20	暗黒褐色土	硬く密にしまり、1cm大の黄色土ブロックを少し含む。
	21	淡黄色砂質土	やや硬さに欠け、小石を少量含む。
	22	淡黄色砂質土	やや硬さに欠け、小石を少量含み、やや粘性がある。
3	23	淡黄灰色粘性砂質土	密にしまり硬い。小石を少量含み粘性がある。
	24	淡黄色粘性砂質土	密にしまり硬い。小石を僅かに含み、やや粘性がある。
	25	黒褐色土	密にしまり硬い。黄色粘質土がブロック状に混じる。
	26	淡黄灰色粘性砂質土	密にしまり硬い。小石を少量含み粘性がある。
	27	淡黄色粘性砂質土	密にしまり硬い。小石を僅かに含み、やや粘性がある。
2	28	淡黄色粘性砂質土	密にしまり硬い。暗黒褐色土がブロック状に混じる。
	29	淡黄色粘性砂質土	密にしまり硬い。暗黒褐色土がブロック状に少量混じる。
	30	暗黄灰褐色土	硬くしまりがあり、小石を少量含む。
1	31	黒褐色土	硬くしまりがあり、淡黄色砂質土が混在。
	32	黒褐色土	硬くしまりがあり、小石を含まない。
	33	黒褐色土	密にしまり硬く、黄色ブロックが少量混じる。
	34	黒褐色土	密にしまり硬く、黄色ブロックが多く混じる。
	35	黒褐色土	密にしまり硬く、黄色ブロックが少量混じる。
	36	黒褐色土	密にしまり硬く、黄色ブロックがやや多く混じる。
	37	黒褐色土	密にしまり硬く、黄色ブロックが多く混じる。
	38	黒褐色土	密にしまり硬く、黄色ブロックを含まない。
	39	黒褐色土	密にしまり硬く、暗黄褐色土が少量混じる。
	40	黒褐色土	密にしまり硬く、黄色ブロックを僅かに含む。
	41	黒褐色土	密にしまり硬く、暗黄褐色土が少量混じる。
	42	黒褐色土	硬くしまりがあり、黒色土が粒子状に少量混じる。
	43	黒褐色土	硬くしまりがあり、黒色土を粒子状に少し含む。
	44	黒色土	やや硬さとしまりに欠け、黒褐色土がブロック状に少量混じる。
	45	黒褐色土	硬くしまりがあり、黒色土を粒子状に多く含む。
	46	黒褐色土	硬さとしまりに欠け、黄色・暗黄褐色ブロックを少量含む。
	47	暗褐色土	黒色土を含まず、やや硬さとしまりに欠ける。
	48	暗褐色土	黒色土を含まず、やや硬さとしまりに欠ける。47よりやや暗い。
	49	暗褐色土	やや硬さとしまりに欠け、黒色土をブロック状にごく少量含む。
	50	黒褐色土	やや硬さとしまりに欠け、暗褐色土を少量含む。
	51	暗褐色土	やや硬さとしまりに欠け、黒色土を含まない。
	52	黒褐色土	やや硬さとしまりに欠け、黒色土をブロック状に少量含む。
	53	暗褐色土	やや硬さとしまりに欠け、黒色土を含まない。
	54	黒褐色土	やや硬さとしまりに欠け、黒色土・黄色土をブロック状に少量含む。
	55	黒褐色土	やや硬さとしまりに欠け、黒色土をブロック状に少量含む。
	56	暗褐色土	やや硬さとしまりに欠け、黒色土を含まない。
	57	黒色土	硬さとしまりに欠ける。
	58	黒褐色土	やや硬さとしまりに欠け、暗褐色土が多く混じる。
	59	暗褐色土	やや硬さとしまりに欠け、黒色土を含まない。
	60	黒色土	旧表土
	61	暗黄褐色土	縄文時代後期包含層
	62	黒褐色土	AT含む

石室西側

層番号	土層の状況	
1	表土、撹乱土	表土及び樹根等による撹乱
2	淡黄褐色砂質土	やや暗く硬くしまりがあり、小石をごく少量含む。
3	暗褐色砂質土	やや硬くしまりがあり、小石を多く含む。
4	淡黄褐色砂質土	やや硬くしまりがあり、小石を多量に含む。
5	淡黄褐色砂質土	硬くしまりがあり、小石を少量含む。
6	淡黄褐色砂質土	硬く密にしまりがあり、小石を少量含む
7	暗褐色土	硬くしまりがあり、小石をごく少量含む。
8	淡黄褐色砂質土	硬く密にしまりがあり、小石を少量含む。
9	黒褐色土	硬く密にしまりがある。
10	淡黄褐色土	極めて硬くしまりがあり、小石を含まない。やや粘性がある。
11	淡黄褐色土	かなり硬くしまりがあり、小石を少量含む。やや粘性がある。
12	淡黄褐色土	硬くしまりがあり、小石を少量含む。
13	暗褐色砂質土	やや硬くしまりがあり、小石を少量含む。
14	黒褐色土	やや硬さとしまりに欠け、小石を多く含む。
15	淡黄褐色土	かなり硬く密にしまる。小石を含まない。
16	淡黄褐色土	極めて硬く密にしまる。小石を含まない。
17	淡黄褐色土	硬く密にしまり、小石を含まない。
18	淡黄褐色土	しまりはあるが、やや硬さに欠け、小石を少量含む。
19	黒色土	旧表土
20	暗黄褐色土	縄文時代後期包含層

第Ⅳ章　総　　括

第１節　各調査成果の要旨

調査で得られた具体的な数値は前章に記しているため、それ以外の要旨を以下に記す。

１　後円部の調査から

塚坊主古墳の主体部は、くびれ部に向かってほぼ南に開口する（MN-3°-E）横穴式石室で、平面形は、羨道部、前室、後室からなる複室墳である。石室の壁は玉名郡玉東町三の岳産と推定される安山岩を用いて、割石小口積みされている。

羨道部は、削平により床面の傾斜は不明で、両壁に石材が確認できる。また羨門部に閉塞石が存在するが詳細は不明である。

前室の両壁石材の大半は移動しており、全貌は明らかにできていない。左側は羨門と玄門の袖石が残り、右側は抜取穴が確認され、４ヵ所の袖石で上部を支えていたと思われる。

後室平面は、ほぼ正方形に近く、奥壁沿に凝灰岩の家形の屋根を持つ石屋形を置き、その前に同じく凝灰岩の板石で屍床を区画している。また壁材の積み方は前室より丁寧である。壁材の小口面には、赤色顔料を施し、石屋形内部の奥壁、両側壁には円文、三角文等が確認された。石屋形内壁の装飾については、赤色顔料の線を最初に描き、その後面的に顔料を施すという技法を用い、各面の装飾を上下に区分して文様を描いていることが分かった。

盛土の調査では、石室掘り方の一部を明らかにし、土盛の工程と天井石運搬の作業面が確認され、失われた天井石の高さを推定する根拠を得ることができた。

２　周濠の調査成果から（第23図）

周濠調査の成果から、後円部直径を約29.6mとし、全体図に後円部直径の1/8の正方形区画（3.7m四方）を重ねて、全体を復元したものが第23図である。[1]

このことから、以前の調査で復元されていた墳丘主軸の位置は今回の成果と同一と見られ、横穴式石室の後室奥壁のほぼ中央部が、この主軸上にあることが分かった。また前方部はシンメトリーでなく左側（西側）が広がっている。

復元した古墳の規模に関する数値をまとめると次のようになる。（　）内数値は残存値である。

①全長	約55.0m	（約54.28m）
②墳丘全長	約43.4m	（約43.92m）
③後円部直径	約29.6m	（約29.50m）
④後円部直径（周濠含）	約42.6m	（約40.58m）
⑤くびれ部幅	約14.8m	（約16.06m）
⑥くびれ部幅（周濠含）	約26.2m	
⑦前方部幅	約20.0m	
⑧前方部幅（周濠含）	約29.6m	

註(1)－１　石部正志・田中英夫・宮川徙・堀田啓一　1977　「メスリ山古墳の墳丘築造企画の復元につい

て」『メスリ山古墳』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第35冊　橿原考古学研究所編

－２　石部正志・田中英夫・宮川徙・堀田啓一　1978　「前方後円墳築造企画の基準と単位」『考古学ジャーナル』NO150　ニューサイエンス社

－３　宮川徙　1979　「前方後円墳築造企画の「基準尺度」について」『橿原考古学研究所論集』第四

第23図　塚坊主古墳復元図

橿原考古学研究所編　吉川弘文館

これによると、

とが多いとされている。塚坊主古墳の場合は、

る。

3　出土遺物から

今回の調査も含めた数度の調査で、

塚坊主古墳の円筒埴輪についてまとめてみたい。

円筒埴輪は、

く、

あり[2]、

底部調整を施すものがある。

以上のような要素から、

Ⅴ期[4]に位置付けてよいと思われる。

また須恵器に関しては、

告[5]とこの埴輪の年代は、

註(2)　本文において、

た。報告書執筆中に菊水町教育委員会の好意で、

展示品の中に同様の爪状圧痕がタガの下辺に並ぶ埴輪を認めた。改めて本報告の爪状圧痕を詳細に観察すると、

ないかと思われる。

(3)　川西宏幸　1978　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－2（付記）で、

る。

(4)　高橋徹　1992　「九州」『古墳時代の研究』9　雄山閣

(5)－1　菊水町教育委員会編　1976　「船山」　菊水町教育委員会文化財調査報告書第1集　菊水町教育委員会

－2　江田船山古墳編集委員会編　1980　「清原古墳群周隍調査概要」『江田船山古墳』　菊水町教育委員会

－3　緒方勉編　1982　「清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査」　熊本県文化財調査報告第55集　熊本県教育委員会

第2節　問題点と今後の課題

1　石室から

塚坊主古墳の石室は、

持つ伝左山古墳と前室空間が確保される臼塚古墳・大坊古墳・チブサン古墳を介する、

位置付けられている。[6]以上の古墳の石室は、

後室に比して前室の面積、

ここで、

第２節　問題点と今後の課題

　平面形態で見ると、
の要素は見いだせず、
　また、
は玄門の左袖に１本加わり、
門・玄門の両袖に各１本ずつ加わっている。（いずれも本来の袖石よりやや小さい）
　さらに、
いため明確ではないが、
臼塚古墳では袖石→楣石→天井石で、
チブサン古墳では、
の変遷順は、従
の天井構造は、
　ここで、
を実見していないことから、
　また、
掘込み、
地から見いだすことは、
形右側（東側）の石積みの観察が十分行えなかったことなどから困難であった。ちなみに、
の石積みの作業単位と思われるのは、
壁の31.60m以下の部分では、
単位の中で、
　さらに、
報告では２年度調査の成果を掲載していないため、
註(6)　高木恭二　1993　「横穴式石室の地域性」『季刊考古学第45号特集横穴式石室の世界』　雄山閣
　(7)　松本健郎　1970　「複室墳の諸問題－熊本県菊池川流域－」『熊本史学第37号』　熊本史学会

２　出土遺物から

　さて、
墳である京塚古墳を別にして、
年が示されていた。[8]今回の報告でも、
墳周濠から出土した須恵器により、
で引き上げられたが[9]、
　このことから、
今後、何
註(8)　註５－２に同じ
　(9)　註５－３に同じ

写 真 図 版

図版１　塚坊主古墳全景

図版２

１．塚坊主古墳遠景（西から）

２．石　室（南から）

図版３　石屋形装飾（正面）

図版４　石屋形装飾（正面）

図版５　石屋形装飾（側壁）

１．石屋形左壁

２．石屋形右壁

図版6　石　室

1．石　室（南から）

2．石　室（北から）

図版７　石　室

1．石　室（東から）

2．石　室（西から）

図版８　石　室

１．前室左壁

２．後室左壁

図版９　石　室

１．後室右壁

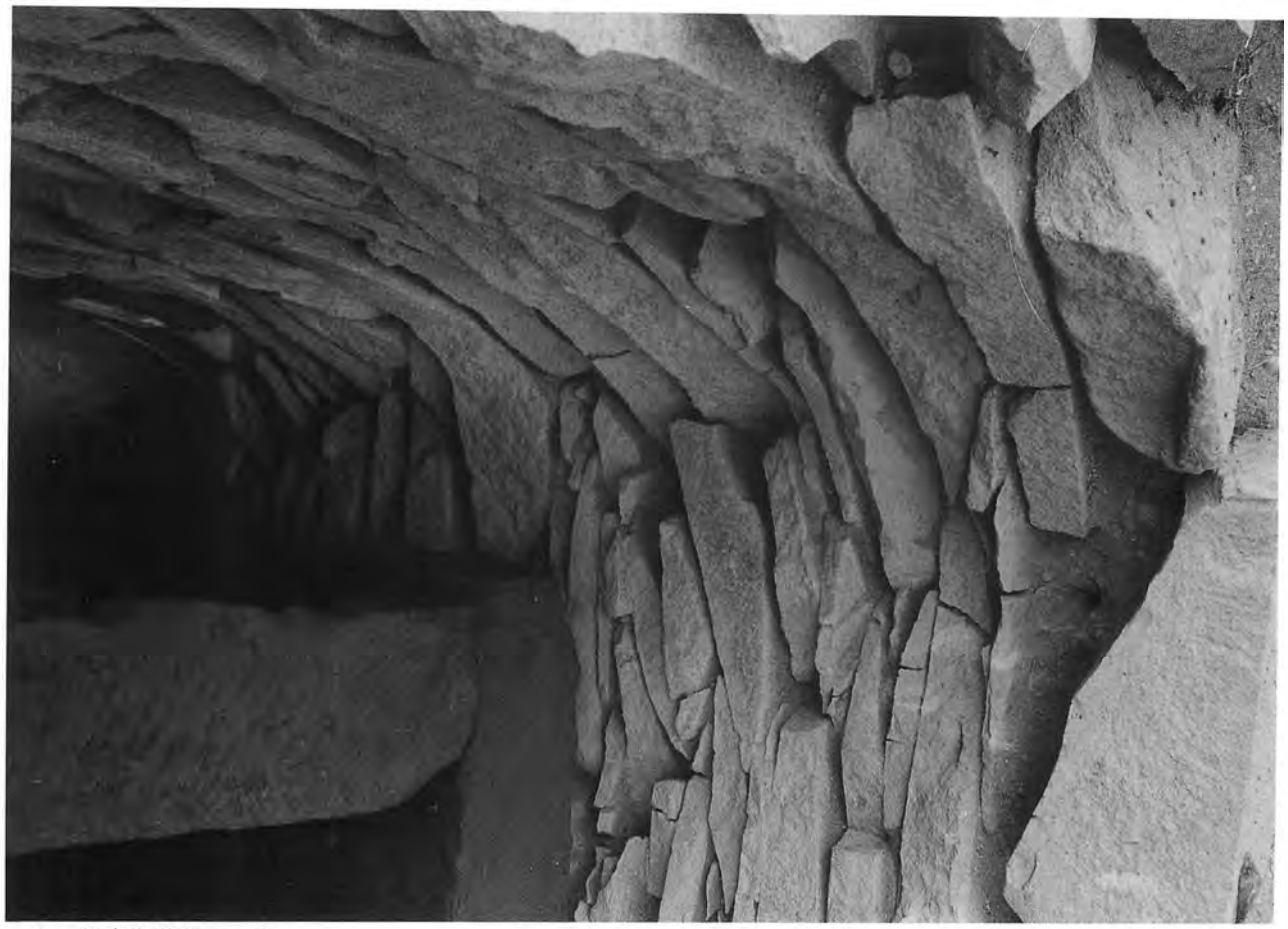
２．前　室（北から）

図版10　石　室

1．後室左袖

2．後室右袖

図版11　石　室



1．後室奥壁左コーナー

2．後室奥壁右コーナー

図版12　墳　丘

1．石室東側土層

2．石室西側

図版13　墳　丘

1．石室西側土層

2．石室西側土層

図版14　周　濠

1．Aトレンチ（南から）

2．Aトレンチ（南東から）

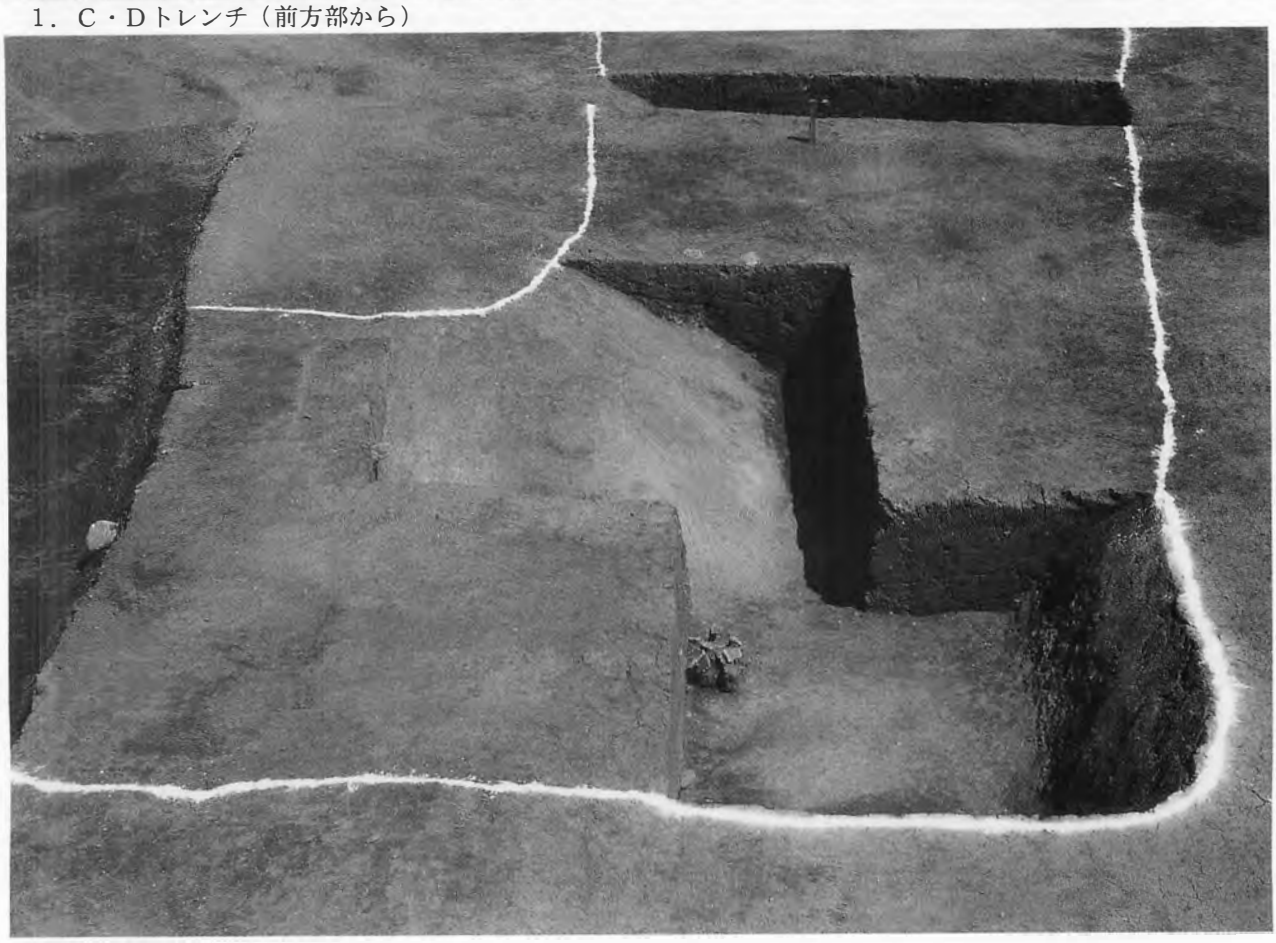
図版15　周　濠

1．Aトレンチ遺物出土状況

2．Bトレンチ（南から）

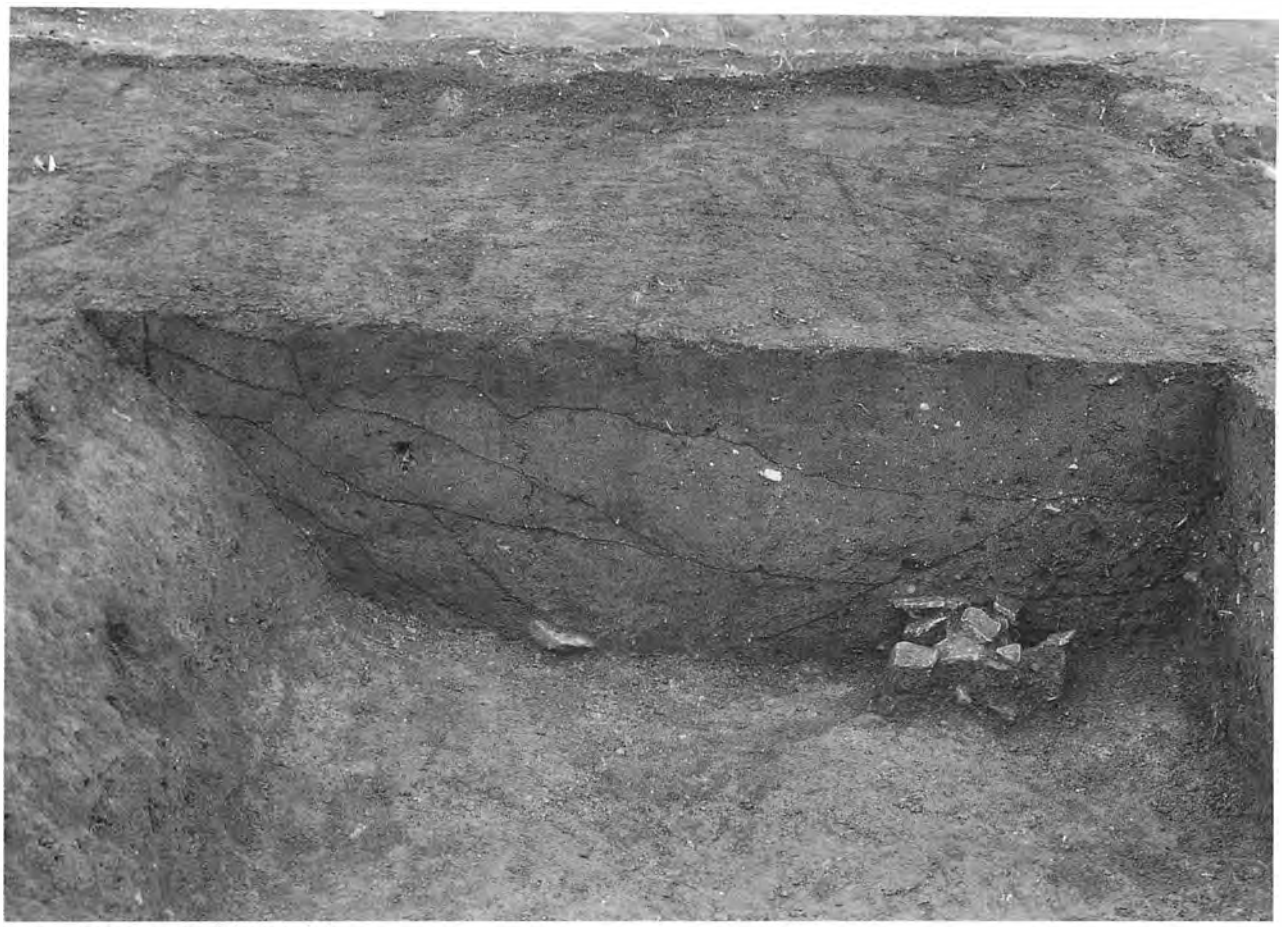
図版16　周　濠

1．C・Dトレンチ（前方部から）

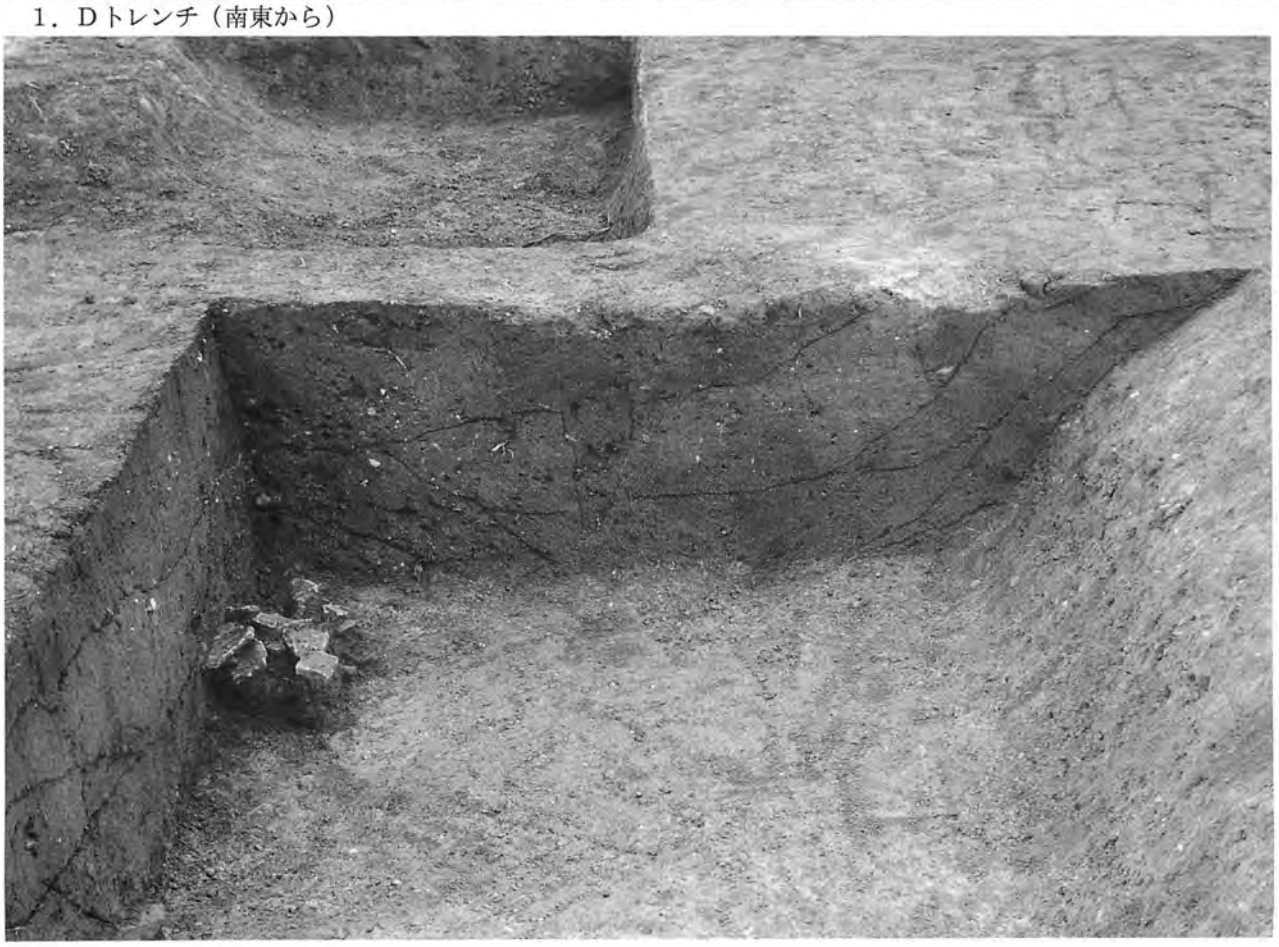


2．C・Dトレンチ（南西から）

図版17　周　濠

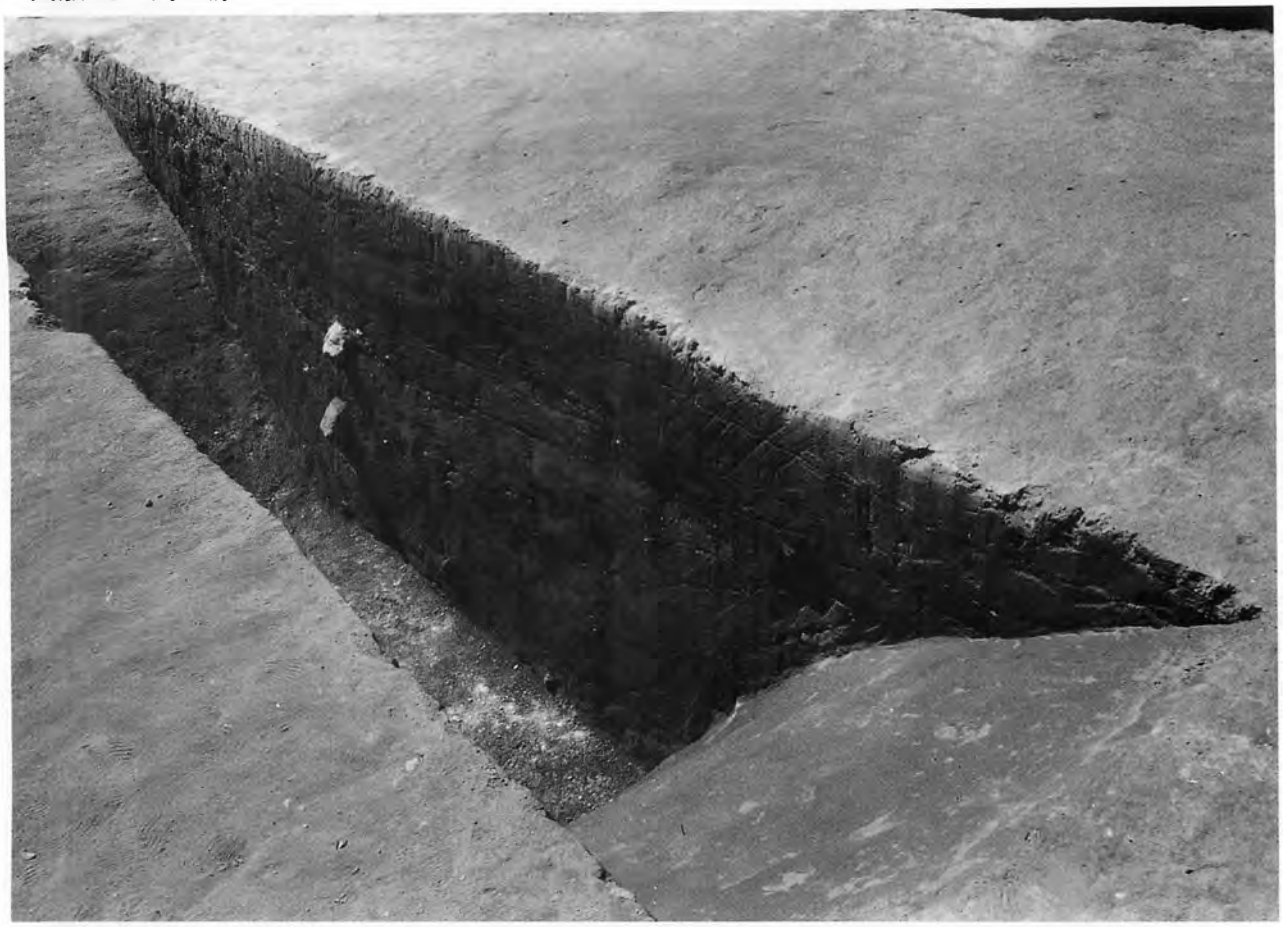


1．Dトレンチ（南東から）



2．Dトレンチ（南西から）

図版18　周　濠

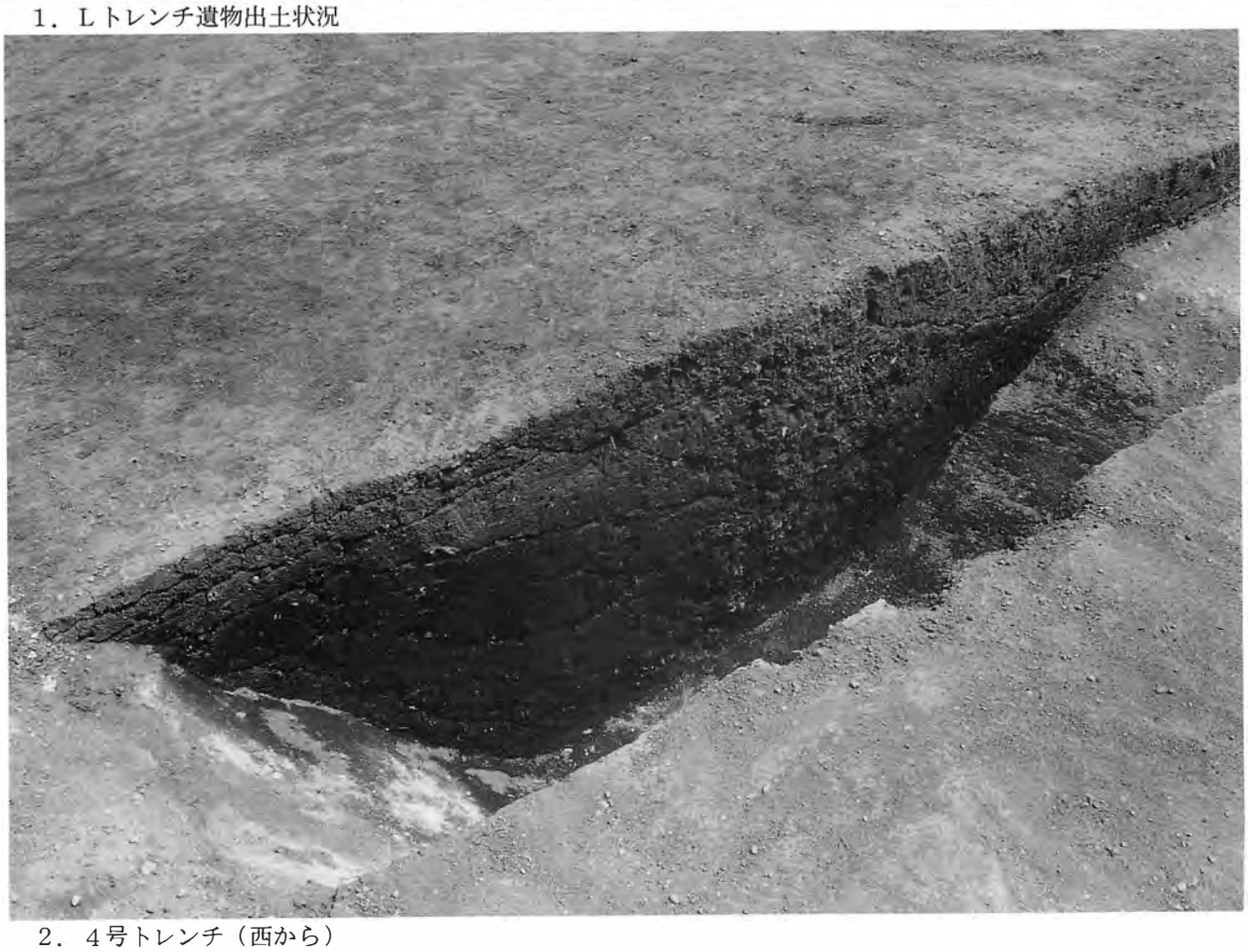


1．Ｌトレンチ（東から）

2．Ｌトレンチ（北東から）

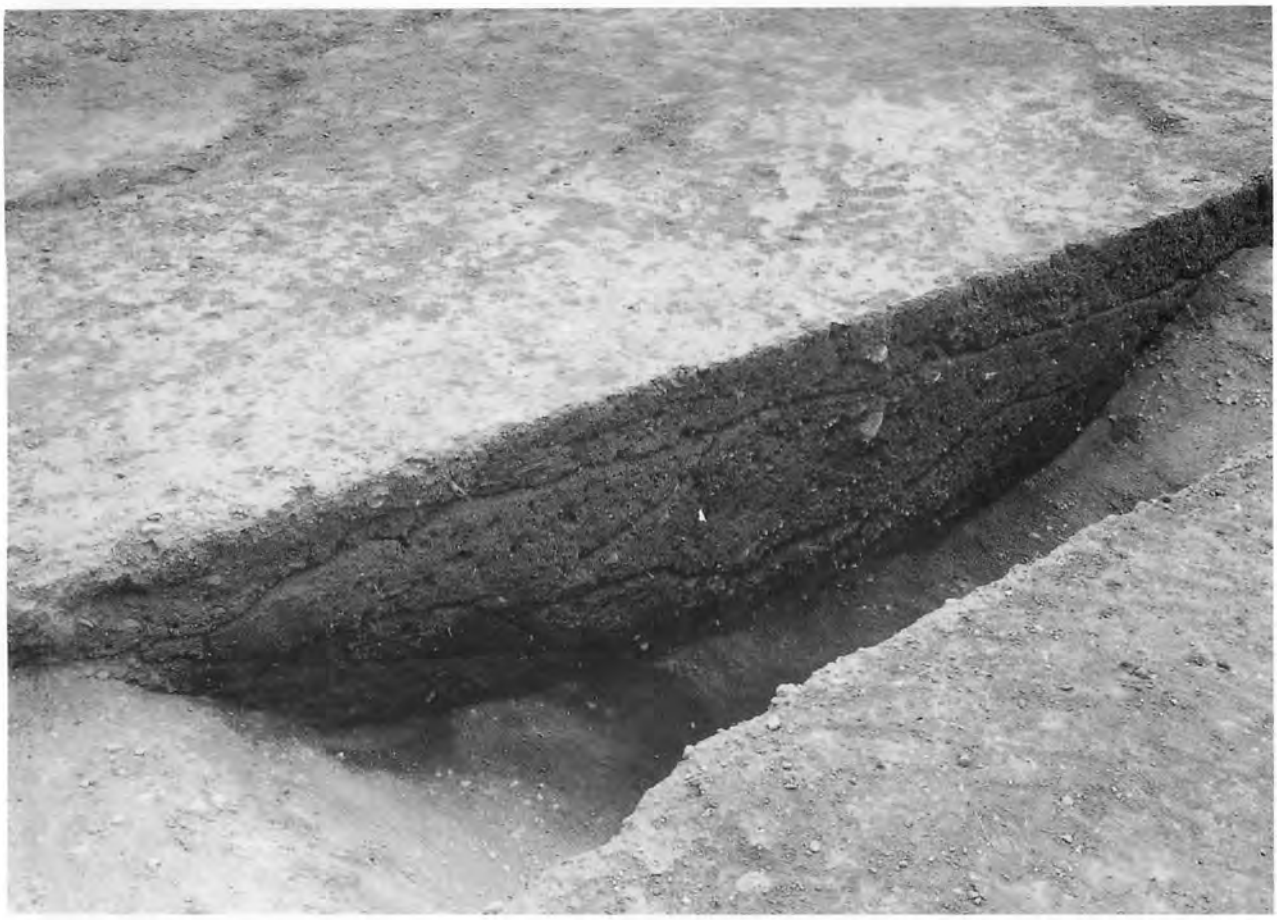
図版19　周　濠

1．Ｌトレンチ遺物出土状況



2．４号トレンチ（西から）

図版20　周　濠



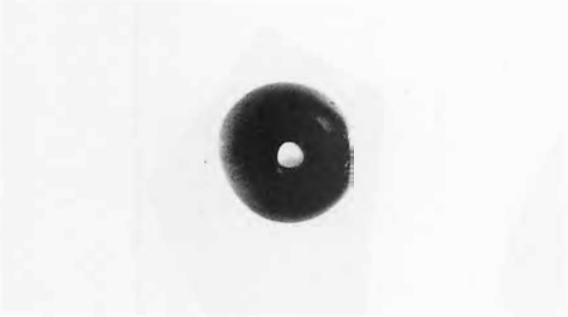
1．6号トレンチ（西から）

2．前方部西側（後円部から）

図版21　出土遺物（約1/4 第19図の番号と同）

図版22　出土遺物（第20図の番号と同、1,2,4,6は約1/4、3,6,8は約1/3）

図版23　出土遺物（玉類・形象埴輪・円筒埴輪）



1．小玉（２倍）

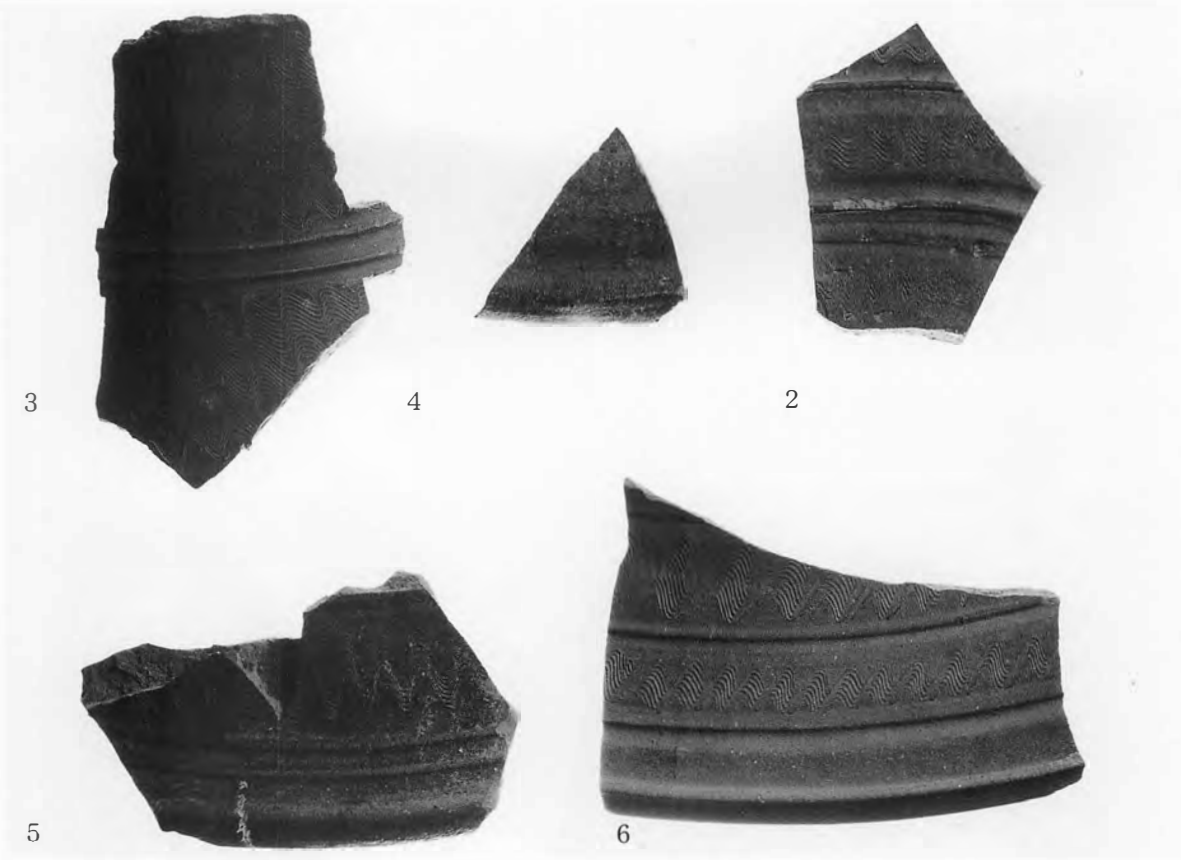
2．粟玉（２倍）

3．形象埴輪（第18図－１　1/1）

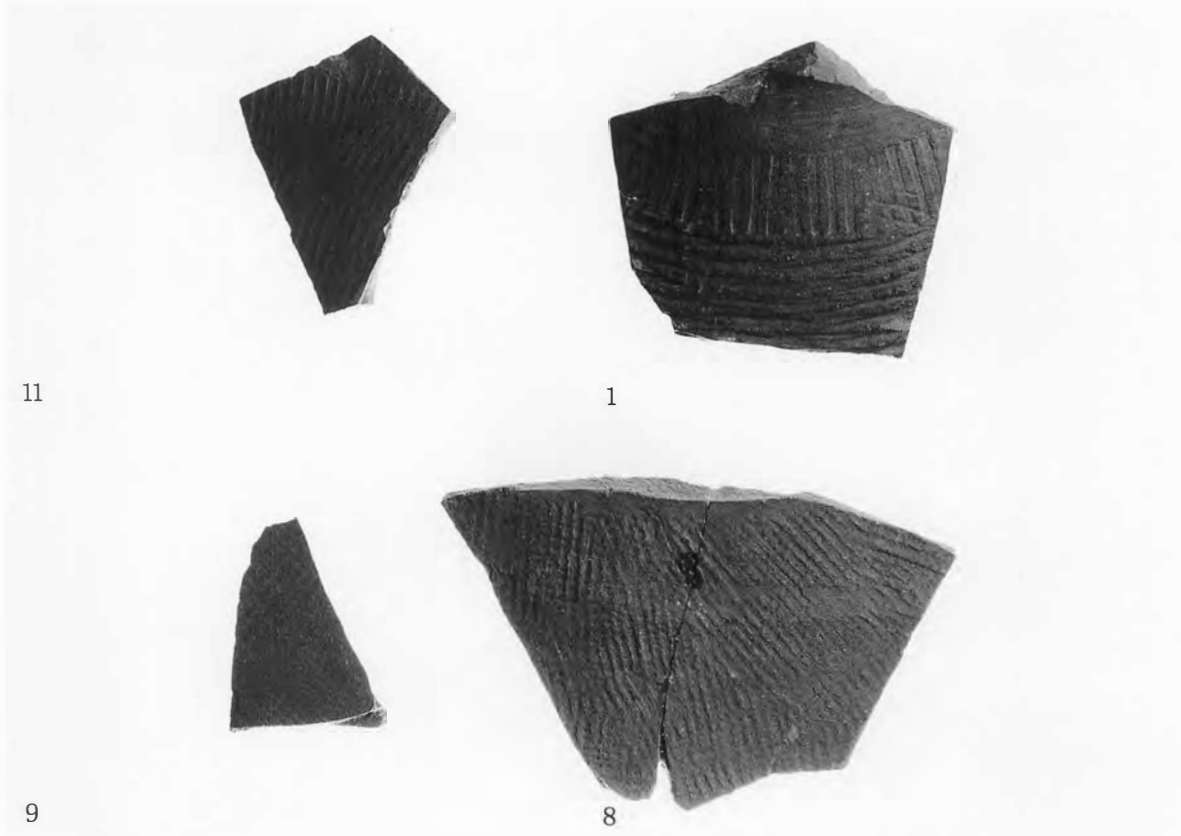
4．形象埴輪(第18図－２　1/1)

5．第20図－７（約1/3）

図版24　出土遺物（須恵器 約1/2）

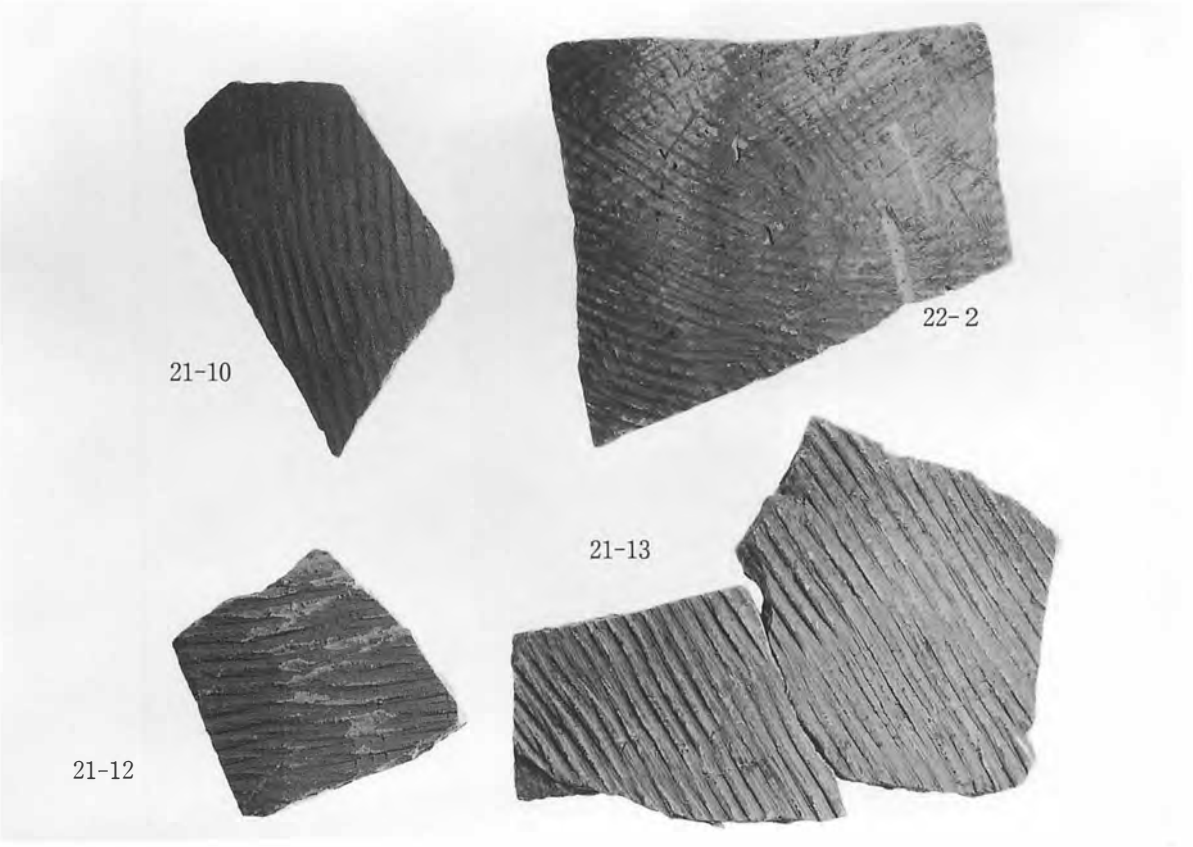


1．須恵器（第21図の番号と同）



2．須恵器（第21図の番号と同）

図版25　出土遺物（須恵器 約1/2）



1．須恵器

2．第22図－1　須恵器

3．第21図－1　内面

図版26　出土遺物（須恵器 約1/2）

1．第22図－3

2．第22図－4

熊本県文化財調査報告　第161集

塚坊主古墳

平成９年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862　熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　株式会社　城野印刷所
〒861-22　熊本県上益城郡益城町広崎1630-1
☎（096）286-3366

08 教委 教文
② 004

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 161 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：塚坊主古墳
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日